

『カンボジア王国基礎教育調査』

教育学部・国際協力推進プラットフォーム連携プロジェクト

『アジア地域における国際教育協力事業 - カンボジア王国 Siem
Reap 州教員研修支援のモデル構築に関する研究 - 』

平成23年度 実施視察報告書（2）

（平成24年4月）

教育学部

和泉研二、海野勇三、佐伯里英子

田中大輔、林 秀晃、阿部弘和

目 次

I	はじめに ～本プロジェクトの経緯と概要～ 和泉 研二	1
II	訪問先について 和泉 研二	2
III	カンボジアの子どもたちに学校体育を (2) —現地が求める教育支援と私たちに可能な支援のマッチングを求めて— 海野 勇三	7
IV	カンボジアの学校保健の現状について 佐伯 里英子	24
V	現職教員から見たカンボジアの教育 ～現地の学校への支援と国際理解教育の在り方について～ 田中 大輔	31
VI	カンボジア支援事業に参加して 林 秀晃	40
VII	カンボジアでの教育支援プロジェクト—これまでとこれから 阿部 弘和	43
VIII	カンボジアの子どもたちの生活と意識(調査結果の概要) 海野勇三、佐伯里英子、田中大輔、林秀晃、阿部弘和、和泉研二	52
IX	おわりに 和泉 研二	66

I はじめに ～本プロジェクトの経緯と概要～

和泉研二

国際貢献は大学に課せられた重要な責務の一つであり、山口大学教育学部においても、教育をキーワードとした何らかの国際貢献に寄与したいと考える。そこで、平成20年度に、学部が有する長年の学校教育や教員養成に関する経験と実績を活かし、カンボジア、ベトナム、バングラディシュ等、アジアの途上国の学校教育や教員養成を支援することを目的に、学部内の有志により「教育国際支援プロジェクト」チームを組織した。それまで教育学部では、組織立った支援の経験がなく、足がかりさえない状態であったため、活動は徐々に足場を固めながら行うこととし、以下の3段階での実施を想定した。

第1段階：途上国の教育について情報収集を行うとともに、現地に赴き現状を観察分析し、課題を発掘する。

第2段階：現地の状況により適した教員研修支援の在り方を検討するため、現地の小学校において支援の試行を実施する。

第3段階：以上の準備期間を経て、国内外の行政機関、JICA、NGO等と連携をはかりながら国際支援プロジェクトを計画し実施する。

これまでの活動としては、国際協力推進プラットフォームとの連携により、プロジェクト「カンボジア王国の学校教育と教員養成の現状と問題点に関する現地調査」を実施した。平成20年度には、阿部弘和、和泉研二（以上、理科教育選修）、小粥良（国際理解教育コース）が、平成21年度には石井由理（国際理解教育コース）が現地に赴き、課題発掘調査を行った。また、平成22年度には、教育学部の石井由理教授が並行して実施しているプロジェクトにより、カンボジアの小学校関係者を本学に招聘し、交流を深めてきた。

平成22年度には、上述の第1段階にあたる活動を踏まえ、和泉、阿部（退職後、有志として自費参加）の他、友定保博、海野勇三（以上、保健体育選修）がカンボジアを訪れ、第2段階として以下の3つの活動を実施した。

- (1) カンボジア王国が国策として充実を図っている理科の模範授業の試行
- (2) これまでのプロジェクトを通して信頼関係を構築したカンボジア王国 Siem Reap州のワット・ボー小学校において、学校保健に関する現職教員を対象とした講習会の実施

(3) 新しく教科となる体育を中心としたカンボジアの学校教育事情の調査

今回は、第2段階から第3段階へ移行するステップとして、これまでの実績を踏まえ、以下のような活動の実施を計画した。

- (1) ワット・ポー小学校から要望の強かった学校保健の講習（教員対象）
- (2) 新しく正課として取り入れられた体育の授業の試行
- (3) 支援活動の行き届いていない地域での山口大学支援拠点の探索
- (4) 支援の在り方を考える上で重要な要素である、カンボジアの小学生の生活実態の調査
- (5) 大学生の相互交流の在り方を考える上で重要な要素となる、カンボジアの大学生の意識調査
- (6) 日本からの支援活動の実態調査および今後の方向性に関する調査

学校保健の講習および体育の授業の試行については、より学校現場に即した実践的なものとなること、また日本とカンボジアの小学校現場の違いをきちんと理解し、試行の経験を踏まえながら、今後、どのような講習や授業が有効かを探ることが重要である。そこで、今回は、現職の養護教諭経験者および小学校教員に実施を依頼することにした。さらに、学生から本プロジェクトに関する意見や教員養成から見た意義等、生の声を聞くこと、また他の学生への波及効果を期待して、従来から参加希望の申し出のあった学部学生に参加を要請することとした。また、理科教育については、昨年度試行しており、今回は、日程の関係もあって試行自体は見送ったが、カンボジアでも重視されている理科教育（保健的な内容を含む）を引き続き調査することとした。

以上、教育学部から和泉研二（代表者、理科教育選修教授）、海野勇三（保健体育選修教授）、佐伯里英子（附属総合教育実践センター客員准教授、養護教諭経験者）、附属光小学校から田中大輔（附属光小学校教諭、体育科）、教育学部4年生の林秀晃（理科教育選修）、そして平成20年春、カンボジアを対象国として支援活動を実施するために「教育国際支援プロジェクト」チームを教育学部内に発足させた阿部弘和（前代表者、元教育学部教授）の6名で現地調査チームを立ち上げ、調査に赴いた。

II 訪問先について

和泉研二

現地訪問のための旅行期間は、2011年12月11日（日）～12月18日（日）である。ハノイ経由でカンボジアに渡航し、シエムリアップ（Siem Reap）州を中心にした北部地区、およびプノンペン市で活動を行った。視察先および視察概要は、以下のとおりである。

1. シエムリアップ 初等教育教員養成学校

（Siem Riap Provincial Teacher Training Center (PTTC)）

日時：12月12日（月） 場所：シエムリアップ市街地内

訪問者：和泉、阿部、海野、佐伯、田中、林

主な対応者：LeavOra 校長

- 主な活動：1) PTTC 校長、LeavOra 氏からの聞き取り調査
2) 校舎、図書室、理科棟（新築）、一般教室、授業等の見学
3) 附属小学校、教室、設備、授業の見学
4) 食堂・売店、運動場等、環境・衛生状態視察

2. ワット・ボー小学校（Wat Boo）

日時：12月12日（月）、13日（火） 場所：シエムリアップ市街地

訪問者：和泉、阿部、海野、佐伯、田中、林

主な対応者：ブン・キム・チェン校長、田中千草校長補佐ほか

- 主な活動：12日 1) 表敬訪問
2) 学校保健講習会および体育授業実施に関する打合せ
3) 校舎、授業、音楽隊活動視察
4) ボール、文房具等の寄贈
13日 1) 学校保健講習会の実施（午前1回、午後1回）
2) 体育模擬授業の実施（午前1回、午後1回）
3) アンケート実施

3. ワット・チャオ（Wat Chao）小学校（体育の拠点校）

日時：12月12日（月） 場所：シエムリアップ市郊外

訪問者：和泉、阿部、海野、佐伯、田中、林

主な対応者：教頭ほか

- 主な活動：1) アンケート実施
2) ボール、文房具等の寄贈
3) 校舎、授業、施設の見学

4. スピッター (SPITLER) 小学校 (英語教育に重点)

日時：12月12日(月) 場所：シエムリアップ市郊外

訪問者：和泉、阿部、海野、佐伯、田中、林

主な対応者：James Latt Jim 教諭ほか

- 主な活動：1) アンケート実施
2) ボール、文房具等の寄贈
3) 校舎、授業、施設の見学

5. トルロビアン・宮下小学校訪問 (郊外の小規模校)

日時：12月13日(火) 場所：シエムリアップ州郊外、プク郡

視察者：和泉、阿部、海野

主な対応者：校長ほか

- 主な活動：1) アンケート実施
2) ボール、文房具等の寄贈
3) 校舎、授業、施設の見学

6. パックパン小学校訪問 (郊外の小規模校)

日時：12月13日(火) 場所：シエムリアップ州郊外、プク郡

訪問者：和泉、阿部、海野

主な対応者：校長ほか

- 主な活動：1) アンケート実施
2) ボール、文房具等の寄贈
3) 校舎、授業、施設の見学

7. ササースダム郡中核学校訪問 (郊外の複数の学校の拠点校)

日時：12月13日(火) 場所：シエムリアップ州ササースダム郡

訪問者：和泉、阿部、海野

- 主な活動：1) アンケート実施
2) ボール、文房具等の寄贈
3) 校舎、授業、施設の見学

8. チョンカル小学校ほか北部小学校 (支援が行き届かない田舎の小規模校)

日時：12月14日 (水) 場所：ウドンマイチェイ州

訪問者：和泉、阿部、海野

- 主な活動：1) アンケート実施
2) ボール、文房具等の寄贈
3) 校舎、授業、施設の見学

9. チョンクニエス (CHONG KHNEAS) 村の小学校、保健センター (水上生活者の村)

日時：3月6日 (日) 場所：トンレサップ湖周辺

訪問者：佐伯、田中、林

主な活動：校舎見学、保健センター見学、生活環境・衛生状態視察

10. JICA

日時：12月15日 (木) 場所：プノンペン (於 JICA 事務所)

訪問者：和泉、阿部、海野、佐伯、田中、林

対応者：小林雪治 (次長)、金澤祥子、水沢文、小川紀子コーディネータ

- 主な活動：1) 教育を中心としたカンボジア王国の現状に関する情報収集
2) JICA 等、現地の支援団体による支援状況に関する情報収集
3) 施設・設備見学

11. NOP 法人 CIEFS (シーセフ) (大学を含む教育への支援)

日時：12月15日 (木) 場所：プノンペン (於 CIEFS 事務所)

訪問者：和泉、阿部、海野、佐伯、田中、林

対応者：金森正臣 (理事・カンボジアオフィス副代表、愛教大名誉教授)

- 主な活動：1) CIEFS の支援活動に関する情報収集
2) 現地への教育支援に関する意見交換

1 2. 王立プノンペン大学 (唯一の王立大学で、日本語学科を有する)

日時：12月15日(木) 場所：プノンペン大学内会議室

訪問者：和泉、阿部、海野、佐伯、田中、林

主な対応者：OUM RAVY 教授 (当日不在にて、代理の方が対応)

主な活動：1) 大学生の学習・生活状況調査

2) 日本の教育事情についての講義・質疑応答

3) 施設見学 (日本センターを含む)

1 3. 日本大使館

日時：12月16日(金) 場所：プノンペン 日本大使館内会議室

訪問者：和泉、阿部、佐伯、田中、林

主な対応者：近藤直光 (二等書記官)

主な活動：1) 教育を中心としたカンボジア王国の現状に関する情報収集

2) 大使館が行っている支援等に関する情報収集

3) カンボジアにおける有効な支援の在り方に関する意見交換

1 4. NPO 法人 Hearts of Gold

日時：12月16日(金) 場所：プノンペン Hearts of Gold 事務所

訪問者：海野

主な対応者：山口 拓 氏

主な活動：1) Hearts of Gold の支援活動に関する情報収集

2) スポーツおよび学校体育の支援に関する意見交換

III カンボジアの子どもたちに学校体育を (2)

—現地を求める教育支援と私たちに可能な支援のマッチングを求めて—

海野 勇三

0. 探索的調査の意図

昨年度に引き続き、学部長裁量経費による助成と国際教育協力プラットフォームからの支援をうけて、カンボジアへの第2次の探索的調査（2011年12月11～17日）に参加する機会を得た。また、そこでの調査結果を受けて、体育分野のみの補足的調査と現地関係者との協議を促進するべく、単独で第3次視察調査（2012年3月13～19日）を実施した。前回の第1次探索的調査で私は、カンボジアの子どもたちの生活と学びと育ちの現状について肌で感じ取ってことを課題として臨んだ。カンボジアの子どもたちに学校体育を提供したい、「ゆきとどいた学校体育を」とまでは望まない（望めない）までも、せめて「必要にして最低限度の学校体育」をカンボジアの子どもたちに提供したいとの強い思いから、条件の許す限り、現実と向き合おうと五感をフルに動員して情報収集を行った（『カンボジア視察報告（第1次）2011年』の拙稿「カンボジアの子どもたちに学校体育を」を参照）。

ところで、この度の第2次探索的調査では、第1次調査の経験を踏まえて、個人的に次の4つの目的を設定して参加した。

1) 第1次の視察調査をプロモートしてくれたガイド兼通訳のV氏が、私たちの帰国する間にさりげなく言った（助言してくれた）言葉がずっと気にかかっていた。それは、私たち調査団が視察した「カンボジアの子どもと生活と学校」はシェムリアップのそれであり、V氏によれば、「『本当の』カンボジアの子どもと生活と学校を知るには、もっと別の地域に足を踏み入れないと……」と言う。その言葉の真意を尋ね直したところ、シェムリアップはカンボジアではアンコールワットへの観光の表玄関にあたる都市であり、すでに世界各国のNPOによって相当の支援が入っている。言い替えると、私たちが感じ取ったカンボジアの子どもたちの生活と学びと育ちの現状は、カンボジアでは条件的に恵まれた地域の現状なのであって、交通手段の整わない地方の村々では今なお支援がほとんど入っていない中、劣悪な条件に置かれている。V氏はそのような地域にこそ目を向けて欲しいというのである。今回の第2次探索的調査では、「本当の現実」と向き合わなければならない。実際には、シェムリアップから北へ130キロほど車を走らせたところにある村に足を踏み入れることとした。

2) 世界各国の NPO による支援が入っているシムリアップとその近郊の学校でさえ、運動用具と運動施設の貧困は目を覆うばかりであった。だとすれば、地方の村々にある学校がどんな状況にあるかは容易に想像できる。2 年前に体育の授業はナショナル・カリキュラム上、必修教科として週 2 時間が設定された



とはいえ、このような教材・教具、施設の貧困では到底実施されるはずもない。事実、訪問した学校の校長や教員に聞き取り調査したところ、「体育の授業を実施しようにも道具も施設



もないので実施していない」、「どうしていいかわからない」、「クメール体操を指導するのがせいぜい」とする声がほとんどであった。また、シムリアップ近郊の学校では、すし詰め状態の教室で、木製の長机に肩を寄せ合って座っている子どもたちの手元にはノートも鉛筆もない光景を目の当たりにした。そこで私たちは、第 2 次調査で訪問するすべての学校にボールと空気入れ、それに鉛筆・鉛筆削り、ノート、消しゴムの文房具を持ち込み、子どもたちに届けることにした。

3) ナショナル・カリキュラムで必修指定された教科体育が授業として実施されていない、または、実施されていてもせいぜいクメール体操程度に留まっているのには、道具や施設の貧困だけが原因とは考えにくい。ナショナル・カリキュラム、体育のカリキュラムそのものに起因している可能性も十分に考えられる。また、授業を指導する教師の側の経験不足もその一因として想定される。そのため、第2次の探索的調査では、カンボジア教育省の発行した体育カリキュラムを入手し、その中身を分析すること、そして教師教育（教師養成と現職研修の双方）の現状を聞き取り調査することを試みる。

4) 第1次調査では、私自身初めてのカンボジア訪問ということもあって、まずは可能な限り自身の五感を働かせて、子どもたちの生活と学びと育ちの現状を感じ取ろうとした。今回の調査では、前もって簡単な調査票を作成して、市街地、市街地近郊、農村部の地域別に子どもたちの生活の実態と意識をデータとして確認し、考察することを試みた(別の節で報告してあるので参照されたい)。

以下に、第2次および3次視察調査の活動と調査結果の概要を報告するが、ここでは、特にカンボジアの現行学習指導要領(保健体育スポーツ科:小学校版)について考察を試みる。はじめに、前報で示しておいた分析の視点を再度確認しておきたい。

1. 分析の視点の確認

1) 学校体育の構造

カンボジアの学校で「教育活動の一環としての体育」が実施され定着していく上で、どのような条件が整えられる必要があるのだろうか？学校体育という時、そこには①教科の体育授業、②運動会などの体育行事、③教科外の運動クラブ活動の3つの領域がある。したがって「カンボジアの子どもたちに学校体育を」は次のように言い換えてもいいだろう。

①「カンボジアの子どもたちに体育の授業を」

②「カンボジアの子どもたちに体育行事を」

③「カンボジアの子どもたちに運動クラブ活動を」

今回の訪問では①の体育授業の実施と普及の可能性を中心としながらも、②運動会と③運動クラブ活動に関しても注目し、実施の可能性を探ることとした。

2) 教育条件

上述の①～③が現地の学校で実施され定着していく上で求められる条件を、主体的条件と客観的条件とに仕分けして検討することが有効であろう。すなわち、主体的条件：学習の主人公である子どもたち、教える主体である教師、そして教育活動をプランニングしたり、全体を調整したりするコーディネーターなど、いわゆる人に関わる条件である。

客観的条件：運動やスポーツをするための道具、施設、時間、運動やスポーツそのものの行い方やルールに関する知識および指導内容や指導法に関する知識等の情報であり、いわゆるカネ・ヒマ・バショと称される条件である。

さらにもう一つ、地域的条件というものも考慮されなければならない。これには、家庭や保護者に関するものと地理的および気象条件に関するものがあるであろう。

そこでこれらの教育条件を横軸に、そして学校体育の構造を縦軸においてマトリックスをつくと表-1 のようになる。このマトリックスの一つ一つが分析視点となる。

	主体的条件			客観的条件				地域的条件	
	子ども	教師	コーディネーター	道具	施設	時間	情報	家庭・保護者	地理・気象
体育授業									
体育行事									
運動クラブ活動									

2. 保健体育スポーツ科学習指導要領（小学校）の内容分析

カンボジアの教育青少年スポーツ省は、JICA とそのパートナーである Hearts

of Gold(NPO/NGO)の支援のもと、2006年に小学校学習指導要領（以下、指導要領）を作成した。教科名称の保健体育スポーツ科が示すとおり、大きく体育スポーツ領域と保健領域の二領域で構成されており、総ページ数68ページ、他に補足資料として体力測定の実施方法・記録用紙、さらに学習指導案（本時案）の例示、学年別の内容領域別配当時間数が掲載されている。ここでは、作成に協力したHearts of Goldの手による日本語版をもとに、指導要領の概要を示しておこう。

1) 教科の目的・目標

指導要領の冒頭、「児童にとってスポーツが持つ意義」を次のように述べている。

「学校の体育の授業において児童が発達段階に即したスポーツを行うことにより、教育青年スポーツ省が求めている『良い英知と精神は健全な身体を持つ者に宿る』という政策目標を達成していくことが可能になる。例えば、スポーツを通して、児童はそれぞれのスポーツで求められる技能を新たに習得したり、人間としての自らの新たな可能性を知ったり、それを拡大していく。また、自己の能力に応じて練習や試合に参加し、勝敗を経験する中で、互いが節度をもって相互に支援しあい、仲間との良好な関係を築いていく。ひいてはそれが、家庭、学校、社会における良好な人間関係や団結力を培い、豊かな社会の実現に貢献していくことになる。」

これを受けて、保健体育スポーツ科の授業は、「スポーツを通じて人々が生涯にわたり健全で豊かな社会生活を営むために必要な資質・能力を身につけていくことに必要不可欠な役割を担っている」のであり、「小学校に在籍しているすべての児童が良質の保健体育の授業を受けることができるように」、また「すべての児童の健全な身体、情緒、認識能力ならびに社会性の発達を促し、生涯にわたりスポーツを営む愛好的な態度を培う」授業を実施していくための指導方針として学習指導要領を提供したとされる。また「保健体育の授業を受けることで児童は、他教科での学習をより効果的に進めることができるようになる」と教科の有用性を強調している。

そして、保健体育スポーツ科の目的を次の二本柱で構成している。

①健康で安全な日常生活を営むために必要な身体的、情緒的、知的、社会的能力の発達を促す

②発達段階に即し、教育的に見て適切なスポーツを行うために必要な資質・能力を育成する

さらにこれら二つの目的を実現するために、次の5つの下位目標が示されている。

(1) 発達段階や自己の能力に即してスポーツに対する愛好的態度やそれを尊重する価値観を養うとともに、健康で安全な日常生活を営む態度を養う (Attitude)

(2) 発達段階や自己の能力に応じてスポーツを行ったり、観賞したり、多くの人達と一緒にスポーツを楽しむために必要な基礎的知識や学習方法を身につける (Knowledge)

(3) 発達段階や自己の能力に応じてスポーツを楽しむために必要な基礎的な技能や戦術能、体力を身につける (Skill)

(4) 発達段階や自己の能力に応じて様々な人々と一緒にスポーツを楽しむために必要な社会的な技能を身につける (Cooperation)

(5) 健康で安全な日常生活を営むために必要な知識や方法、生活習慣を身につける (Habit)

ここにみられるように、カンボジアでは教科体育を構成する際の原理(=教科論)として、スポーツ教育論を基盤としているものと推察される。また、先に「保健体育の授業を受けることで児童は、他教科での学習をより効果的に進めることができるようになる」と保健体育スポーツ科の他教科に対する有用性を強調していると指摘したが、低学年及び高学年の目標叙述の中でも(2)の Knowledge の項目で「また、知的能力の発達を促し、他の教科の学習が円滑に行えるようにする」と明記されている。次に内容構成を見てみよう。

2) 体育スポーツ領域の内容構成と標準時間配当

表-2 は体育スポーツ科の領域と配当時間である。水泳領域が4年次から学習が開始されるのに伴って、陸上運動とリズムに合わせた運動の配当時間が高学年で減少しているほかは、いずれの種目も各学年で7~8時間が配当されている。なお1単位時間は40分授業である。

表－2 保健体育スポーツ科(小学校)の領域内容構成と配当時間

運動領域	種目	1年	2年	3年	4年	5年	6年
基本運動	リズムに合わせた運動	8	8	8	6	6	6
	器械体操	8	8	8	7	7	7
	陸上運動／トラック競技	8	8	8	7	7	6
	陸上運動／フィールド競技	8	8	8	5	5	6
水泳	水泳	－	－	－	8	8	8
ボール遊び	サッカー	8	8	8	7	7	7
	バスケットボール	8	8	8	7	7	7
	バレーボール	8	8	8	7	7	7

さらに、学習指導要領には、学年ごとにそれぞれの運動種目で学習すべき内容と配当時間が示されている。表－3は第6学年の詳細をまとめたものである。

表－3 第6学年の学習内容と配当時間

運動領域	種目	内容
リズムに合わせた運動	フィットネス運動 (4時間)	Fitness movement (No. 16)
		Fitness movement (No. 17)
		Fitness movement (No. 18)
		Fitness movement (No. 19)
	力試し(2時間)	片足腕引きずもう
		地藏運び(体を固定した人を運ぶ)
	ゲーム	コーック タック アッカ(現地の遊び)
飛び石ジャンプ(ココナッツの殻使用)		
竹馬		
器械体操	マット運動(5時間)	起立位からの前転(補助付き)
		起立位からの後転(補助付き)
		側転
		三点倒立
		倒立

	鉄棒運動(2時間)	前/後ろ回り(補助付き)	
		足かけ前/後ろ回り(補助付き)	
	ゲーム	コーック タック アッカ(現地の遊び)	
		ムカデ競争 おんぶ・メッセージ(伝言ゲームのおんぶ走)	
陸上運動	歩行(1時間)	60・100m 早歩き(競歩)	
	走行 (5時間)	短距離走(2時間)	短距離走(ゴールを設定) 40・60m 走
		リレー(2時間)	40m リレー
			60m リレー
		ハードル走(1時間)	60m ハードル走
	跳躍 (3時間)	幅跳び(1時間)	フルスピード助走からの踏み切り
		高跳び(2時間)	3歩踏み切りからの挟みとび(ゴム紐使用)
			助走踏み切りからの挟みとび(ゴム紐使用)
	投てき(2時間)	砂袋投げ	
		砲丸投げ	
	ゲーム	(空中で8の字ポーズをとりながらの)長縄跳び	
		ハンカチ落とし/チャオル チュン	
		(さまざまなテーマでの)まねっこ遊び	
コーック タック アッカ(現地の遊び)			
棒引き(押し)			
綱引き			
水泳	自由形(2時間)	腕かきと息継ぎを採り入れた泳ぎ方(往復)	
		バタ足と息継ぎを採り入れた泳ぎ方(往復)	
	平泳ぎ(2時間)	腕かきと息継ぎを採り入れた泳ぎ方(往復)	

		バタ足と息継ぎを採り入れた泳ぎ方(往復)
	背泳ぎ(4時間)	背泳スタイル(その場)で水に慣れる練習
		背泳スタイル(その場)で息継ぎに慣れる練習
		背泳スタイルでの伏し浮き
		その場でバタ足(キック)
	ゲーム	潜水ゲーム
		水中でのボール遊び
プールでのスプーン・ピンポン競争		
サッカー	ドリブル(2時間)	スラロームドリブル走(ディフェンダーを立てせる)
		スラロームインステップドリブル(障害物)
	パス(2時間)	(ボールを受けて)インサイド・パス
		(ボールを受けて、目標物に向かって)パス
	トラップ(2時間)	インステップ・トラップ
		胸を使ったトラップ
	シュート(1時間)	ボールを受けて目標物に向かってロングシュート
	ゲーム	チュマー チャップ カンダウ
スヴァードンダンバル		
ハーフコートゲーム		
バスケットボール	パス・スロー(1時間)	(様々な)ドリブルからのフェイクパス(グループ)
	パス・キャッチ(1時間)	ドリブルからのフェイス・パス(1対1)
	シュート(2時間)	3ステップでのボード(の左右)を利用したドリブルシュート
		ドリブルからのボード(の左右)を利用したドリブルシュート
	オフense(1時間)	2対2 オフense

	ディフェンス(2時間)	2対2ディフェンス
		5対5ディフェンス
	ゲーム	5対5ミニゲーム
		スヴァードンダンバル
バレーボール	レシーブ(2時間)	左右に移動しながらのアンダーハンドレシーブ
		アンダーハンドでレシーブし、ネットオーバーさせる
	トス(2時間)	バック・トス
		ネット越しトス
	サーブ(1時間)	ネットをはさんだサーブ(2人組)
	アタック(1時間)	空中でのアタック
	ディフェンス(1時間)	(左右への)ディフェンス
	ゲーム	4対4ミニゲーム
		6対6ミニゲーム
		ハンカチ落とし
(さまざまなテーマでの)まねっこ遊び		

このように、各種目で学習する運動内容に対し、どの程度の時間を当てるのか、そしてどのような練習やゲームを実施するのかまで詳細に示されている。しかも、各学年の内容が示された末尾には「(これらの—海野註)項目は、カンボジア王国の学校体育で保障されるべき課題である」と明記されている。しかし実際、2回にわたる探索的調査で訪問した現地の小学校に関する限り、これらの運動が実施できるような物的条件(=道具・施設)は、ごく限られた学校(体育の中核校)を除いてほとんどすべてと言っていいほど整っていなかった。そのためこうした事情を考慮してか、先の引用文に続けて「各地の状況に応じた授業を実施することが望ましい」とされ、また「授業実施上の配慮事項」の項でも、「授業実施に際しては、地域や学校の実態に即して児童の発達段階に応じて適切な教材を工夫する」と柔軟な対応を督励している。しかし他方で、次のようにも指摘されている。「授業時間、指導内容は、前章に記した『期待される成果』に沿った形で、各校の責任と判断で変更して、実施することが望まれる」

と。つまり、体育授業を実施するための条件がないことを理由に、授業をしないということがないよう、現状の条件の中でも創意工夫をこらしながら、保健体育スポーツ科に「期待される成果」を上げるよう努力することを促しているのである。そこで、「各校の責任と判断で変更して実施する」際に沿うべき「期待される成果」とはどのような内容なのかを見ておきたい。紙数の関係で、6年生の器械運動と水泳およびバスケットボールの内容のみ示す（表－4）。

器械運動	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい技の学習や演技づくりに積極的に取り組めるようになる ・安全に注意して器械運動に取り組めるようになる
	<ul style="list-style-type: none"> ・安全な器具の使い方や自己の能力に応じた技の選択、練習方法、その工夫の仕方について説明できるようになる
	<ul style="list-style-type: none"> ・回転する技や倒立する技といったマット運動の基礎的な複数の技を組み合わせて、正確に演技できるようになる ・身体的な能力を適切に発達させることができるようになる
	<ul style="list-style-type: none"> ・順番やきまりを守って運動できるようになる ・全員が楽しく授業に参加できるように、仲間と上手に関わりながら、互いに補助、協力して運動できるようになる
水泳	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に水泳に取り組めるようになる ・安全に注意して泳げるようになる ・競争に対して公正な態度をとれるようになる
	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の能力に応じた水泳の練習方法やその工夫の仕方について説明できるようになる
	<ul style="list-style-type: none"> ・一定の距離を上手に泳げるようになる ・身体的な能力を適切に発達させることができるようになる
	<ul style="list-style-type: none"> ・順番やきまりを守って運動できるようになる ・全員が楽しく授業に参加できるように、仲間と上手に関わり、互いに協力して水泳ができるようになる
バスケットボール	<ul style="list-style-type: none"> ・発達段階に即して簡易化されたゲームに積極的に参加できるようになる
	<ul style="list-style-type: none"> ・安全に留意してゲームに参加できるようになる
	<ul style="list-style-type: none"> ・審判に対して適切な態度が取れるとともに勝敗に対して公正な態度を

	とれるようになる
	<ul style="list-style-type: none"> ・ボールを持たないときの動きとボール操作の技能の名称を言えるようになる ・試合の開始方法、得点方法、禁止されているプレーについて理解できるようになる ・練習の工夫の仕方について理解できるようになる
	<ul style="list-style-type: none"> ・ボールを保持した際に適切な判断ができるようになる ・ボール操作の技能をゲーム中に効果的に発揮できるようになる ・ボールを持たないときに効果的にパフォーマンスを発揮できるようになる ・身体的な能力を適切に発達させることができるようになる

器械運動では、確かに一部の学校の園庭に UNICEF 等の支援で鉄棒、雲梯、滑り台、シーソーなどが設置されていた。しかし、その鉄棒や雲梯は小学生の手で握って移動したり回転するには太すぎて体育授業で使用するのには適さないように思えたし、また、室内でマットを敷いて技の練習や連続技づくりをするなどという環境はほぼ皆無といってよかった。同様に、水泳では、プールを設置してある小学校はないなかで、可能性として想定されるのは、学校周辺の泥水で濁った湖沼かクreekであろう。さらに、校庭にバスケットボールのコートやゴールを保有する学校は、市街地の小学校で散見されたほかは、ほとんどの学校で見ることがなかった。ボールすら用意されていない小学校の方が圧倒的に多い。このように考えると、いくら「地域や学校の実態に即して児童の発達段階に応じて適切な教材を工夫」しても、「各校の責任と判断で変更して実施」しようと試みても、指導要領が示す「期待される成果」を上げるのは困難と言わざるを得ないように思われる。誤解を恐れずに言えば、カンボジアの教育青少年スポーツ省の作成した指導要領は、果たしてカンボジアの現状にマッチングしているのだろうか？体育授業を指導する経験を持たない現地の小学校教師でも実施可能な教科カリキュラムになっていないのではないかと感じる。現行指導要領の作成者名簿には、日本人の研究者、現場教師、NPO 専門職員ら 6 名の名前が記載されている。まえがきには「(彼らの一海野註) 支援を受け、教育青年スポーツ省内指導要領策定担当/学校体育スポーツ局が・・・策定した」と記されている。

前報の「まとめにかえて」で、私は次のように述べていた。「日本の体育をそのままカンボジアに持って行ったとしても決して効果を上げることはないであろうことは確認できた。今後、カンボジアの生活に根差した体育（＝生活体育）の可能性を探っていきたい。」と。確かに現地の教育行政の体育関係者の手によって作成されたのであろうが、今回、カンボジアの現行指導要領を読んでみて、改めてカンボジア版生活体育をリデザインする必要性を強く感じた。

3) 保健領域の内容構成と標準時間配当

次に、保健領域を見てみよう。表－5は保健領域の内容構成と標準時間配当をまとめたものである。なお1単位時間は40分授業である。

内 容	1年	2年	3年	4年	5年	6年
健康な日常生活	6	6	4	5	－	－
身体の成長	－	－	－	－	4	4
けがの予防	3	6	4	4	2	2
疾病予防	3	－	4	4	4	4
薬物対策	－	－	－	0	2	2
心身の健康	－	－	－	3	4	4

保健領域の学習では、「自身や他人を尊重し、健康で安全な日常生活を営むために必要な知識を身につけるとともに、人生においてスポーツやゲームを通じて楽しみの質を高め、健康的、計画的な生活とそれらを実際に活用できるようにすること」が意図されている。以下では、表－5に示した内容領域ごとの目標と学習内容を見てみる。

健康な生活	健康な日常生活を営むことができるように、学校及び家庭での過ごし方に関心を持ち、健康な生活の仕方について理解する。	
	衛生	健康で安全な日常生活を送るために、児童に身体を常に清潔に保つ必要性和その方法について理解させる
	環境	健康で安全な日常生活を送るために、児童に衛生的な生

		活環境を整える必要性とその方法について理解させる
	栄養	健康で安全な日常生活を送るために必要な栄養摂取の必要性とその方法について理解させる
身体の成長		小学校期における身体の発育、発達の特徴について正しく理解させる。
	発育・発達	加齢に伴う身体の変化の特徴ならびに身体の成長、発達には個人差があることを理解させる
	性教育	思春期には体つきが変わったり、初潮、精通などが起こったりすることや異性への関心が芽生えることを理解させる
けがの予防と回復		交通事故、水の事故等でけがをする原因やけがの予防方法ならびにけがからのリハビリテーションの方法について理解するとともに、簡単な手当てができるようにする
	けがの予防	生活の中で派生する様々なけがの原因とその予防策について理解させる
	けがの処置	けがが悪化しないように適切な救急措置の必要性について理解させるとともに、簡単な手当てができるようにする
	危険の回避	交通事故や水難事故などの予防および対応に関する知識を高めるとともに、交通ルールについて理解させる
疾病予防と回復		疾病の原因と予防方法について理解するとともに、それらを実際に日常生活の中で活用できるようにする。
	疾病	ウイルス(インフルエンザ、蚊を媒体とする感染症、腹痛など)による疾病および予防方法ならびに生活習慣が原因で派生する疾病(糖尿病)とその予防方法について理解させる
	HIV/AIDS	現在の性的動向を説明しながら HIV/AIDS 予防について児童に理解させ、母親である女性の身体に起こる危険について理解させるとともにバースコントロールの道具を紹介する
薬物対策	薬物対策	健康を害するタバコや飲酒、薬物乱用の弊害と影響について理解させる
心の健康		心と体が密接な関係を持って発達することを理解する。心が発達してい

		るときの不安や悩みの解決方法を理解する。
	コミュニケーション	多様な生活経験を通して心が発達し、心と体は互いに密接に関係しながら発達することを理解させ、人間関係は心の発達に影響を及ぼすことを理解させる
	不安の解消	不安や悩みの適切な解決方法について理解させるとともに、それを日常生活で実際に用いることができるようにする

また、体育スポーツ領域と同様に、学年ごとに保健領域の学習で「期待される成果」が明示されている。ここでは紙数の関係で、第1学年と6学年の「期待される成果」を示しておく(表-7)。

1年次	健康な生活	・学校生活などで規則正しい生活を送るための基本的な行動について理解できるようになる(うがい、手洗い、歯磨き、清潔な衣類の着用など)
		・衛生的で健康に良い規則正しい生活環境の基本的な事柄について理解できるようになる(身の周りの整頓、教室の掃除、ゴミ捨てなど)
		・食事/排泄、休息/睡眠、運動の一定した生活リズムを送る必要性を知る
1年次	けがの予防	・家、学校、地域社会における様々な場面の隠された危険を発見し、予防に役立てるための知識を手に入れる
		・授業中や毎日の生活の中で起こるけがの種類、予防策、応急処置を知る(擦り傷、刺し傷、みみず腫れ、切り傷など)
	疾病予防	・毎日の生活の中で起こる日常的な病気の種類と予防策を知る(虫歯、眼病、中耳炎、腹痛など)
6年次	身体の成長	・思春期に起こる心と体の変化や他人との違いについて理解できるようになる
	けがの予防	・交通ルールや偶発的な事故を防ぐための方法を学び、事故(交通事故、水難事故、不慮の事故など)を回避できるようになる
		・不慮の事故について簡単な対応と応急処置法ができるようになる

疾病予防	・死に至る流行病の種類と症状、予防法と対処法を学び、実践できるようになる(鳥インフルエンザ、狂牛病、結核など)
	・HIV/AIDS患者との接し方について理解できるようになる
薬物対策	・ドラッグが社会にもたらす影響を理解できるようになる
心身の健康	・心と体の緊張と緩和について理解できるようになる
	・うつ病について学び、うつを克服する方法とうつ病患者との接し方について知る

これらの内容の詳細はすべて「カンボジア王国の学校保健授業で保障されるべき課題である」と明記されており、「各学校の判断で、本指導要領で記した各保健科授業で保障されるべき課題と類似した他の学校活動や連携事業の内容及び時間を代替することが望まれる」と保健指導の重要性を強調している。また、他の教科においても、健康や保健学習に相当する内容が配置されていることも指摘しておきたい。実際、三度にわたる探索的調査を踏まえて言えば、保健学習・保健指導はカンボジアの現状に鑑みるとき最も緊急性の高い分野であると思われる。

3. 結びにかえて

紙数が許せば、教員養成所(PTTC)の統一カリキュラムの中の保健体育科の分析と現職教員の体育授業に関わる研修の現段階も報告したいのであるが、別の機会にしたい。私は、プノンペンのHearts of Gold(NPO/NGO)の事務所を訪問し、山口拓氏からこれまでの支援の経過とこれからの計画に関し詳細なレクチャーをいただいた。現地の人々の手による展開、あくまでも当事者の主体性に依拠ながらの地道な支援活動の詳細を聞きながら、多くの示唆を得ることができた。記して感謝したい。

また、第三次調査でタイとラオスの国境沿いの地域を訪問し、現地の教育関係者とじっくりと話し合った際、私は日本の小学校で実施されている運動会について紹介したのだが、校長先生と学校補佐役(元校長の長老)に大いに興味を持っていただいたようで、2013年の1月に小学校を拠点に村の運動会を開催しようという構想が持ち上がった。また、別の北部の小学校でも、常設ではないが季節的な運動クラブ活動を実施していることも聞き取り調査の中で判明した。本稿の冒頭で私は「カンボジアの子どもたちに学校体育を」には3つのルートがあると述べた。①体育の授業、②体育行事、③運動クラブ活動である。第3

次の探索的調査の手応えでいえば、地域づくり(それは、地域が学校に結集するイメージ)を意図しながら、運動会または運動クラブ活動を学校の中に組織していき、校内の教師集団と子ども達が体育の有用さを感じた、その先に体育授業への取り組みが見えてくるように思われる。

IV カンボジアの学校保健の現状について

附属教育実践総合支援センター

佐伯 理英子

1 ワットポー小学校の子どもの健康問題

事前に、校長補佐の田中千草さんに、カンボジアの子どもの命や健康に関わるようなけがや病気について質問した。田中さんは、

- (1) 無料の小児病院があるが、病気やけがをしても受診しない。素人判断で市販の薬を使ったり、民間療法にゆだねたりということが多い。
- (2) けがの場合、小さなけがを放置し、細菌感染して深刻になる場合がある。
- (3) 発熱した場合、デング熱やマラリアの危険性があるというのは周知しているが、受診せず放置して死に至ったというケースもある。
- (4) 寄生虫等で腹痛を起こすことが多い。衛生教育の必要性がある。
- (5) 理科や社会科の授業で病気やエイズ、衛生について多く触れられているが、担任によって指導内容の差が大きい。

このようなことを問題と感じていた。そこで「教師は子どもたちに、衛生教育をどう教えていいかわからないので、子どもへの衛生教育の仕方を教えてほしい。」という要望があった。

2 ワットポー小学校での講習

カンボジアの小、中学校はほとんど、午前、午後の二部制で授業が行われている。午前と午後の教師は異なる。従って、午前と午後同じ内容で、90分の講習を実施した。参加した教師は各々約30名であった。

- (1) 擦り傷、切り傷、打撲、捻挫、骨折等けがをした場合の処置と処置をする場合に気をつけることについて
- (2) 腹痛症状の時の観察と見極めについて
- (3) 頭痛症状の時の観察と見極めについて
- (4) 手洗いの意義と方法について
- (5) 虫歯の予防と歯磨きの方法について (実習)
- (6) 視力検査の方法について



(7) 日本の小学校の保健室（映像）

(8) 初経指導について

3 講習の感想

(1) 午前の部と午後の部の参加者の雰囲気違った。午前中仕事をして午後参加した教師は、疲れている様子であった。

(2) 手洗いの大切さについて指導したが、現在の日本では極端な清潔志向があり、アレルギーとの関連について取り沙汰されている。寄生虫を持っていることでアレルギーになりにくいとの学説がある。実際に、ここ数十年間の日本の子どもにとって一番の健康問題となっているアレルギーが、カンボジアの子どもにはほとんどない。水質の問題もあり、衛生教育や手洗い指導の目標をどこに置くのか、考える必要がある。

ちなみに私は、カンボジア滞在中、水道水と石けんで手洗いした後、ペットボトルの水で流すようにしていた。水がないところでは、アルコールティッシュで拭いていた。

(3) 初経指導について話したとき、教師たちがとても恥ずかしそうにしていた。カンボジアの文化として、男性がいるところで月経の話をしないらしい。しかし月経教育の必要性は感じているようであった。私が持参していた子ども向けの月経指導書について、クメール語で書かれたものはないかと、質問があった。

4 学校の施設と衛生環境

(1) 保健室

ワットポー小学校に保健室はあるが、ほとんど利用されていない。古くてほとんど使った形跡のないベッドが1台と戸棚があるが、昨年訪問した際に持参した医薬品が使われなくて、そのままあった。また、他の団体が寄付した医薬品やハブラシなども棚に入りきらず、そのまま置いてあった。



医薬品の話を校長先生にしたところ、「すぐ薬品棚を買います。」と言われ、我々がいるうちに業者が運んできた。

(2) ゴミの処理

校地内には柔らかい材質の（ゴム製？）大きな両手鍋のようなゴミ入れがある。町中のゴミ入れも同じもので、ふたがあつたりなかつたりしている。このゴミ入れはその中には分別なしに様々なゴミが入れてあつた。以前はゴミ入れにゴミを入れる習慣がなく、校地内は汚れていたようだが、田中先生や校長先生の努力で、ずいぶんきれいになったとのことであつた。ワットポー小学校訪問中にゴミ収集車が来て、校地内のゴミ箱を全部空にしていった。柔らかいゴミ箱をトラックの上には放り投げて、トラックの上にいる人が中にあるゴミを荷台に移し、また下にいる人に投げて渡していた。



(3) 校地内の露店

学校の敷地内の一角に露店が並んでおり、子どもたちは休み時間や授業前後に自由に買って食べている。決して衛生的なものではない。また、田舎の方の学校に行くと、シジミを干したものが炎天下で売られていた。



(4) 水道施設

保健室に近いところに、アメリカの補助で作られた水道施設があつた。他の水道と違い、**clean drinking water** と表示されていた。ただ、ここで水を飲んでいる子どもたちはあまり見かけなかった。私たち日本人にも「飲まない方がよい」と言われた。子どもたちは自分の



飲み水は、市販されているペットボトルを持って来ている。

(5) 遊びや運動の場所

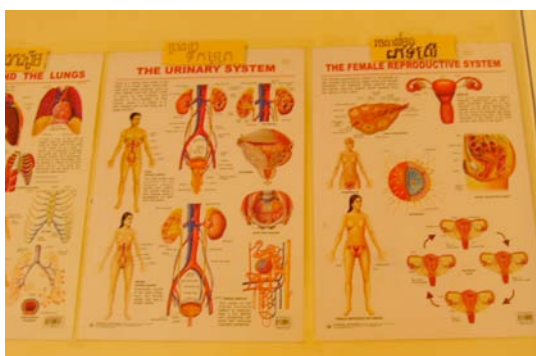
ワットボー小学校は清潔を保つために中庭がセメント張りになっている。運動場はないため、子どもたちは中庭で遊んだり運動をしたりしている。子どもたちは靴を履いているが、転んでけがをすることが多いとのこと。田舎のスピッターラ小学校では、砂ぼこりのする中庭で、裸足で遊んでいた。



5 カンボジアの保健教育

(1) 教員養成学校

教員養成学校の理科教育のために、日本の援助で作られた建物の中に、男女の生殖器や内臓器官の掲示してあった。ただ、この教室は普段あまり使われておらず、このような身体の器官や機能についてきちんと学んでいるかどうか確認できなかった。



(2) ワットチャオ小学校

ワットチャオ小学校は中学校が併設で、体育科教育の指定校になっている。体育の授業は週1時間が理論で1時間が実技。理論では、清潔や手洗い、歯の

健康などについても指導しているということだった。中学校の体育教師はエイズ教育をしており、小学校5、6年生ではライフスキルの授業がある。小学校の教室の入口ドアには、病気予防についての掲示物が貼ってあった。

また、この学校の図書館には、日本の児童図書が多数あった。「かこさとし」氏の保健教育の書籍が、クメール語に翻訳してあった。



(3) プノンペン大学

保健室は医務室のような機能で、医師と看護師が1名ずつ常駐しており、学生に治療のための薬を処方していた。また、部屋の壁には、性感染症予防のためのコンドームの有効性や、喫煙の害などについて掲示してあった。



(4) トレサップ湖上学校

トレサップ湖では約1万人余の人が水上生活をしている。この湖はメコン川につながっており、ベトナム人の水上生活者も多くいる。ここはベトナム人の

ための湖上学校で、約300人の子どもが船の上の学校で学んでいる。写真は湖上学校の校長先生で、後ろの方で子どもたちが学んでいる。この中には孤児もいて、学校がある船で暮らしている。船には炊事の施設もある。飲み水は湖の水を浄水して使い、排水は湖にそのまま流している。身体を思い切り動かして遊ぶ場所はく、湖で泳ぐことが遊びの中心になっている。



6 学校保健に関する支援上の課題

(1) 初経教育・性教育

初経教育が全くされていないことがわかった。必要性を感じている教師はいるが、指導内容、方法が分からないということだった。カンボジアには産婦人科の医師が非常に少なく、女性の出産に伴う事故が多い。医療や保健事情の遅れは途上国に共通するが、学校教育を通して学ぶ可能性はある。ただ、カンボジアでは、性にかかわる指導に対して、恥ずかしいと思う文化が根強くあるように思う。男女一緒に学ぶのであれば尚更と思う。現地の文化を大切にしつつ、性に関する必要な教育をする指導をどうしたらよいか、日本からどうサポートできるか、課題である。

(2) 子どもの成長の記録、統計

日本の学校で毎年実施している健康診断のようなものがない。子どもの身長や体重を測ったデータがなく、成長発達の実態が分からないとのことだった。(CIESF 金森氏による) 今後継続的に支援するのであれば、身長や体重のデータをとることの意味を理解してもらい、積み重ねていけるのではないかと。

(3) 子どもの虐待があるということ

ワットポー小学校訪問日の午後、低学年の女子児童が義理の父親から虐待

を受け、田中先生に連れてこられた。体中にあざがあった。家に帰りたくないと言っているが、警察は取り合ってくれず、彼女を保護してくれるところはどこにもない。しばらく慰められて他の先生がバイクで自宅に送り届けていた。実の母親は性産業で働いており、実の父親ではない。

田中先生は、このような厳しい家庭の状況にあった子どもを6人、里子として個人的に預かって育てている。子どもへの虐待は多いと言われた。

日本でも社会問題になっている厳しい問題で、大学が行う支援でできることがあるかどうか分からない。宗教団体やNPOなどが養護施設を運営するような方法が適切だと思う。ただ、我々がかかわっている子どもたちの笑顔の奥にある、貧しさだけではない現実を知っておきたいと思う。



V 現職教員から見たカンボジアの教育

～現地の学校への支援と国際理解教育の在り方について～

山口大学教育学部附属光小学校

教諭 田中大輔

1 はじめに

今回、山口大学の国際協力プロジェクトへの参加という貴重な機会をいただいた。私のねらいは、二つである。まず、日本とは異なる環境の中、カンボジアの子どもたちが、どのような暮らしをしているのか、自分の目で見た上で支援のあり方を考えていくことである。現職教員として、日本の教育と比較しながら、共通点、相違点を探ろうと考えた。もうひとつは、学んだことを日本での国際理解教育に生かしていくことである。カンボジアの子どもたちへの支援だけでなく、日本の子どもたちへの還元も視野に入れて参加させていただいた。なお、本報告はプロジェクト全体をまとめた詳細ではなく、あくまで現職教員の立場としての実践に視点を絞って報告させていただくことを申し添えておく。

2 カンボジアの教育事情

(1) カンボジアの教育を取り巻く環境

①カンボジアの風土

平成23年12月11日(日)ベトナムのホーチミンを経由して、カンボジアのシェムリアップへ降り立った。

シェムリアップは、世界遺産のアンコールワットで知られる観光都市である。外国人の観光も多く、近年急速に発展している都市である。中心部の街並みは、フランス植民地時代の面影を残しており、思ったよりも都会であった。市場には、食料品があふれ、日用品も、まだまだ輸入に頼るところもあるらしいが、品数は豊富であった。



カンボジア国王の王宮



街中はバイクや車が多い



市場では食料品から日用品まで何でもそろ

気候は、熱帯地方特有の高温多湿であるが、12月は乾季のはじまりにあたり、比較的過ごしやすかった。とはいえ、日中の陽射しは、肌を刺すようであった。

カンボジアの小学校は、午前と午後の2部制である。子どもは、午前午後のどちらかに登校する（ちなみに、一カ月ごとに変わるらしい）。この暑さを考えると、一日中学校にしているのは、確かに厳しいと感じた。

②カンボジアの教育環境

カンボジアの小学校を何校か視察することができた。いずれの学校も、教室の前には黒板、そして子どもには机といす（机といすが一体となっているものが多い）、教室の後ろには掲示板と、日本と同じような教室環境であった。しかし、ひとクラスの人数は多く、学校にもよるが、最大で50人を超えるクラスもあった。

小学校の就学率は、90%を超えるが、これは入学当初の数字であり、高学年になると半数近くに落ち込んでしまう。学校に通うだけの余裕がないことと、必要性を感じられないことが原因であろう。

教師は、日本と同じような担任制で、すべての教科を教える。授業の様子から、子どもに考えさせる授業よりも、教科書を中心に教え込むような授業が多い印象をもった。教師用の机に座っている教師も多く、子どもはプリントやノートへの視写など、自分で学習を進めている場面も多く見かけた。筆記用具やノートは、思ったより行き渡っていると感じた。

日本との違いに驚くことも多かった。まず、午前と午後の2部制である。聞くと、学校に登校していない時間帯は、家の仕事や商売を手伝ったり、塾に通ったりしているそうである。授業中にもかかわらず、教室の外を歩いている子どもを見かけるのは、登校している時間帯ではなく、学校に遊びに来たり、当番の仕事をしにきたりしている子どもがいるからだそうだ。学校の中に飲食できる売店があることにも驚いた。始業前や、休み時間には、バナナフライなどの軽食や、アイスクリーム、ジュースなど、子どもたちは自由に楽しんでいる。まるで日本のお祭りの露店のような印象だった。ただ、すべての子どもがお金をもって登校しているわけではないらしい。経済的な格差は日本以上に大きい。

日本と異なる環境ではあるが、子どもたちは元気で、目はきらきらと輝いていた。子どもはどこの国でもかわいいと感じた。



6年生の教室



運動ができるスペース



校内の売店でアイスクリームを買う子ども

③カンボジアの教員養成

カンボジアで小学校の教員になるには、高校を出て、2年間ほど教員養成大学（PTTC）へ通う必要がある。PTTCは、全国23の地域に一つずつあるが、2、3年前までは、教員不足により、PTTCを出ていなくても教員になれたらしい。現在でも、教師へのなり手は少なく、希望すればほぼ100%採用されるそう。それだけ教師の待遇が低く、アルバイトをしている教師もみられるところから、カンボジアが抱える大きな課題の一つと言える。

3 支援の実際

（1）ワットポー小学校の教育環境

①ワットポー小学校の学校環境

実際に現地の子どもたちへ直接指導できる機会を得た。ワットポー小学校は、観光都市シェムリアップにあるカンボジアの中では比較的都会の学校である。児童数は、午前と午後あわせて5千名を超える超マンモス校。とにかく子どもが多い。通学はかなり広範囲で、スクールバスの渋滞が起こるほどである。かなりの人気校だ。

ワットポー小学校は、保健室の設置やバスケットコートの整備、音楽を取り入れた教育活動など、特色ある教育が行われており、人気があるのも納得である。

しかし、このような先進校でも、教育省が定めた週1回の体育授業が、日本と言う学習指導要領に沿って行われていない。国の政策と現場のズレがあるように感じた。これからは、お金や物だけでなく、ソフトとハードのどちらの支援も必要であろう。

②ワットポー小学校の子どもたち

子どもは目が合うと必ずにこっとほほ笑む。そして、よく挨拶をしてくれた。授業中は、集中して取り組んでいた。休み時間には、ほとんどの子どもが外に出るが、運動場はなく、ダイナミックに体を動かす遊びはできない。おもな遊びは、散歩、食べ歩き、ゴム跳び、ボール投げ、なわとび、ケンパ遊びなどである。ボールや縄跳びは、日本の支援だそうであるが、数が圧倒的に少ない。数えるほどしか見られなかった。

色々な授業を参観することができたが、一番驚いたのは、体育の授業である。体育の授業は、朝の涼しい時間帯に、クメール体操（教師が指示をした動きを一斉に行う集団行動のようなもの）を行うのが一般的であるようだ。体育館や広い運動場もなく、暑さも考えると、体を動かす機会が少なくなってくるのは仕方ないかもしれない。



クメール体操の様子

（２）実地授業

実際に、授業は２コマを午前と午後の２セット行うことができた。午前が５年生、午後が６年生への体育授業である。いわゆる体育の授業を受けた経験がほとんどないであろう現地の子どもの実態を見て、運動を行う前段階の心と体をほぐすことと、色々な動きを広く経験させることを目標として授業を行うこととした。

①実地授業１時間目

まずは、お互いに慣れるところからはじめた。挨拶と自己紹介は、クメール語で行い、後の授業は、通訳を介して行った。１時間目のねらいは、心と体をほぐして、リラックスして思い切り体を動かす土台をつくることである。実際には以下の運動を行った。

- 日本のジャンケン（手で行った後、体全体を使って）
- まねっこ遊び（教師が行った動きをまねる）
 - ・ ジョギング（前向き、後ろ向き）
 - ・ スキップ
 - ・ 手拍子を入れたステップ

・サイドステップ など

○まねっこ遊び（5人で1列に並び、先頭のリーダーの動きをまねる。笛が鳴ったらリーダーを交代する）



全身を使ったジャンケン遊び



リーダーの動きをまねる子どもたち

通訳を介しての授業になるので、なかなか意図が伝わらない場面もあったが、子どもたちは説明をよく聞いて、運動を楽しんでくれた。子ども同士のまねっこ遊びでは、テンションが上がりすぎて、收拾がつかなくなるほど盛り上がった。子どもの動きをみると、言われた動きを行うことはできるが、まねっこ遊びのリーダーなど、自分で考えて動きをつくり出すのは、やはり難しかったようである。

②実地授業 2 時間目

休み時間を少し取った後の2時間目は、ルールのあるゲームを中心に、子ども同士がかかわる場面や、考えて動くような場面をつくるようにした。

○ボールギャザーゲーム（4チームに分かれて、7つのボールを取り合うゲーム）

・正方形のコートの角から、一人ずつお手玉を拾いに行くゲーム。はじめは、コートの中にお手玉が置いてあるが、そこにお手玉が無くなったら、他のチームから取ってもよい。3つのお手玉を持ち帰ったチームの勝ち。

○しっぽとり鬼遊び（4チームで行う陣取り型鬼遊び）

・自分のチーム以外の人のお手玉を取り合う鬼遊び

どちらのゲームも、説明をよく聞いて動くことができた。よくわからないル

ールは、質問もしながら、積極的に取り組む姿が見られた。物事を理解する力は高いと感じた。また、順番を守る、応援する、喜ぶなど道徳心も育っている。男女の仲も良い。



真剣に説明を聞く子どもたち



ゲームで勝ってハイタッチ

ゲームの途中で、勝つためのコツは何か尋ねてみたが、「がんばる」、「心を一つにする」など、情意面のめあてが多く、動きに着目した意見は見られなかった。運動経験が少ないためであろう。

授業の終わりのころには、チームごとに円陣を組んで掛け声をかけるような場面が見られるほど盛り上がった。子どもたちの笑顔が印象的であった。

(3) プノンペン大学での講義

日本語を学ぶ学生を対象に、日本の教育について話す機会を得た。写真を見せながら、小学校の1日の生活を中心に、日本の教育のシステムと子どもの実態とあわせて伝えるようにした。また、教師の役割や責任についても触れた。子どもの生活の実際については、はじめて目にすることも多かったようである。どの学生も真剣なまなざしで聞いてくれた。

4 国際理解教育について

(1) 本校6年生への国際理解教育

自分が学んだことを日本の子どもたちに伝えることも、このたびの大きな使命の一つである。実際には、本校の6年生を対象として、カンボジアへ行く前に2時間、帰国後に2時間を取って、国際理解教育を行った。

① カンボジア研修前（2時間）

まず、子どもたちに、国際協力として研修機会を得たことを話し、カンボジアについての印象を尋ねてみた。子どもからは、「同じアジアの国」、「難民という言葉聞いたことがある」、「食べ物に困っているかもしれない」などの意見が出た。

そこで、実際にカンボジアについて調べることからはじめた。インターネットや図書室で調べ学習を行い、カンボジアの歴史や観光、地理、気候、生活など具体的に知ることができた。日本とカンボジアの共通点や相違点をまとめながら、カンボジアへの興味を深めていった。

次に、実際に現地の子どもと交流することを伝ると、何かプレゼントを贈りたいという意見が出てきた。そこで、どんなものがふさわしいかを考えることになった。やはり、日本らしいものがよいということで、習字と折り紙をつくることになった。習字では、カンボジア、日本、希望、友達、夢、絆 などの言葉を子どもたち自身が選んだ。

事前の指導では、子どものカンボジアに対するイメージは広がったが、具体的にどうかかわっていきたいか意識するまでには至らなかったと言える。



習字をもらってポーズ



折り紙の羽を広げる子どもたち

(いずれもワットポー小学校の子どもたち)

②カンボジア研修後（2時間）

帰国後、写真を交えて報告会を行った。アンコールワットに代表される歴史、品数豊かな市場の様子、子どもたちの元気な笑顔、発展する街の様子など、子どもは自分が持っていたイメージと比較しながら聞くことができた。「思ったより豊かな国だった」、「食べ物がおいしそう」、「アンコールワットなどの建物は、とてもきれい」、「貧富の差が日本以上にあることがわかった」このような声が聞かれた。

サトウヤシからとれた砂糖菓子の試食も行った。「ただ甘いだけでなく、いものような風味がある」、「南国の味がする」など思い思いの感想を語っていた。こうして、子どもたちは、異文化に触れることで、様々な思いをもつことができた。

最後に、カンボジアの子どもたちからとったアンケートの一部を紹介した。このアンケートは、同じものを子どもたちにも実施している。紹介したのは、「あなたは今幸せですか」という質問である。カンボジアの子どもがどう答えたか、予想させた。子どもは、「あまり幸せではない」という答えが多かったのではないかと予想した。しかし、カンボジアの子どもたちは、ほとんどの子どもが、幸せであると答えたのである。日本と比べて、決して物質的には豊かではないカンボジアの子どもたちの思わぬ答えに、みんな驚いたようである。そして、幸せとは何か改めて考えることができた。自分たちと同じ子どもだからこそ、感じることも多かったのではないだろうか。

以下、子どもの感想を抜粋する。

- 幸せとは、人それぞれ思うところは違いうだろうけれど、私の思う幸せとは、一緒に学んだり、笑いあったりできる仲間がいることだと思う。同じ年の子どもたちが、働いている現状を見て、少しでもその子どもたちの救いになりたいと思った。
- 世界はすべてつながっていて、貧富の差もあるけれど、一つ一つの国が助け合うことで、世界ができると思った。外から見て、貧しい国と思っても、心は豊かな人が多いと思った。厳しい生活の中でも、がんばって生きる人たちを見習おうと思った。
- 同じ世界で、こんなにも暮らしが違うとは思わなかった。でも、みんなが幸せと答えたのは、すごいと思った。日本人があれこれ自分の暮らしに文句を言うのは、とても贅沢なことだと思った。改めて自分の生活を見直した。

(2) その他復伝について

今後は、今回の研修で学んだことを現職の先生方にも伝えていきたいと考えている。学校現場においては外国語活動もはじまり、国際理解教育は、これからますます注目されるであろう。今回の私の体験は、ある一つの国で感じた、しかもごく短期間での体験にすぎない。これだけで国際理解教育などおこがま

しいと思う。ただ、自分が感じた驚き、新鮮さ、インパクトが、私自身にどのような変化をもたらしたかは伝えたい。それが何かのきっかけになればと思う。

5 おわりに

今回学んだことは、あまりにも多く、まだ生かしていく段階にはない。自分自身が、その言葉を、術を持ち合わせていないというのが正直な感想である。

実地授業にしても、自分自身は楽しんだが（子どもたちも楽しんでくれたと信じたいが）、これがカンボジアという国にとってどうであったか、ということを見ると、まだまだ自己満足の域を脱していない。これから長く支援を続けていくためにどうすればよいか、考えていくことがこれから求められているのだと思う。国際理解教育をどう行っていくのか考えていくことも同じである。今回の貴重な体験を本当の意味で生かしていけるよう、大切なのはこれからだと強く感じている。



ワットポー小学校の子どもたちと

VI カンボジア支援事業に参加して

山口大学教育学部 理科教育 4年
林 秀晃

1 はじめに

カンボジアの支援のプロジェクトは今回が初めてなのではなく、何年も前から山口大学が行ってきた活動である。また、このプロジェクトはただ単に恵まれないカンボジアの人たちのところに支援に行くことなのではなく、カンボジアの教育や子どもたちの様子などから我々日本人が学ぶべきものがあるということを前提とした活動である。

私は、まだ学校現場に携わっていないが、将来学校現場で生かしていけるようになれたらと思い、今回学生という立場としてこのプロジェクトに参加させてもらった。

2 支援事業の実際

○PTTC（小学校教員養成学校）の学校設備、カリキュラム、附属校の様子などの調査

- ・教師としての質、能力の向上のために、高校卒業後、2年間のカリキュラムから4年間のカリキュラムへの検討
- ・理科室の設備の充実（教科書、顕微鏡、アルコールランプ、人体模型など）
- ・現地の中では高水準の附属校

○ワットポー小学校での講義、授業の補助

- ・カンボジアの教育現状
 - 実質的な情操教育がないという実態
 - 教師を対象とした保健教育（子どもに教えていくために知ってもらおう）
- ・体を動かす授業の重要性
 - 日本の「体育」の授業をカンボジアで取り入れる活動



体育の授業を受けるカンボジアの児童

- ・田中千草さんの活動（カンボジアの孤児6児の母）
 - カンボジアのために活動する日本人
- 現地の小学校（5校）の生徒、教師の現状調査
 - ・カンボジアの国民性
 - 周りと同じ回答を書こうとする児童
 - ・生きていくための生活
 - 学校に行かずに働く子どもや、
 - 午前中は学校に行き午後からは働く子ども
 - ・日本とは同じようで違う将来の夢
 - 医者、教師、警察が大半を占める。
 - 知っている職が少ない。
 - ・地域によって異なる学校の差
 - 充実し過ぎた支援を受ける学校とまったく受けられない学校との生活水準の差



カンボジアの学校風景



カンボジアの学校風景

- JICA（国際協力機構）、CIESF（NGO 団体）、日本大使館での日本の留学及び教育学部設置につ

いての情報収集

- ・支援を行うことに慣れてしまう学校があるということ
- ・支援しただけで終わってしまう団体が多いこと
- ・カンボジアからの日本への支援

3 研修生として学んだこと

- ・低所得の教師によるカンボジアの教育の現実
- ・情操教育の重要性
- ・日本とは違う、子どもたちに教えるべき理科教育
- ・支援の大切さ
- ・年齢や自己表現、識字などの、教科教育以外の教育

4 おわりに

私は、まだ日本の教育現場にすら立っていないが、学生という立場から今回のプロジェクトに参加してカンボジアの教育について触れることができたのは非常に良い経験になった。

また、支援することの重要性も改めて実感した。自分一人ができることは限られているが、鉛筆やノート、ボールなどを届けることだけでも何千人もの笑顔を見ることができたという事実はこれからの自分の中にも大きく根付いていくことだと思っている。私がそうだったのだが、日本人はカンボジアのような国に対して、「自分一人じゃ何もできない」と思ってしまうがちであるが、今回プロジェクトに参加して、人一人でもできることがあり、また必要とされているのだということを実感することができた。

理科という点からは、カンボジアはまだまだ設備などが整っていないので、理科の授業は座学になっているのが現状だが、その中でも日頃の現象や自然についての教育に力をいれるような教育ができるように PTTC での教育に力を入れるとともに、ものだけでない支援をしていく必要があると感じた。

実際に自分が教壇に立ったときは、当たり前である日本の教育とは別の他国の教育について子どもに話をしたい。実際に自分が目の当たりにした光景を子どもに伝えて、子どもに考えさせることが自分が学校現場で一番できることであると思う。このプロジェクトの学生の参加については、今後の教師としての活動にもプラスにはたらくものであると思う。



VII カンボジアでの教育支援プロジェクトーこれまでとこれから

阿部弘和（元理科教育教室）

明治初頭に設立された日本の大学は教育・研究・（運営）を柱に高等教育機関として発展してきた。そして、大学はこれらの活動を通じ、結果として国際社会を含む社会に貢献してきた。しかし、日本がモデルとした先進国の大学では教育・研究に加え「社会貢献」を大学の役割としていた。「社会貢献」は結果としてではなく、市民に大学の機能を開放するサービス、教員が積極的に社会の中で活動し、社会へ貢献する活動である。日本の国立大学はこの「社会貢献」活動をほとんど取り入れることなく運営されてきた。しかし、1990年代になると大学改革の一環として、「社会貢献」を大学の機能とする認識が広まり、ほとんどの国立大学で市民・地域社会への窓口としてのエクステンション・センター等の設置や公開講座の開設などがみられるようになった。教育学部での現職教員の大学院への受け入れは、リカレント教育制度に倣った「社会貢献」の一つである。

しかし、実際には「大学人の任務は教育と研究である」という長年慣れ親しんだ習慣からは抜けがたく、「社会貢献活動はヒマな人がやるもの」から「社会貢献は任務の一つである」への意識改革はまだ時間がかかりそうである。しかし、途上国に赴き、異文化に接しながらの活動は、日本や日本の教育を振り返る機会となり、それぞれの研究・教育に役立つものであり、また、人生を豊かにするものである。専門性を離れ多くの人に参加してほしい活動である。

国際協力・国際支援は「社会貢献」活動の一つであり、特に途上国への支援活動は先進国となった日本の大学に課せられた重要な責務の一つである。そして、これを目的として、学生定員をもつ組織が設置された大学もある。広島大学の「国際協力研究科」、名古屋大学の「国際開発研究科」などがこれにあたる。名古屋大学の学生は在籍したまま、バングラデシュやカンボジアで JICA の協力隊員として活躍していた。また、長崎大学には「国際健康開発研究科」、埼玉大学には「国際開発教育研究センター」がある。また、鳴門教育大は大学の生き残り戦略として、途上国からの留学生・研修生を積極的に受け入れている。

1. 教育学部における国際協力・国際支援活動

教育学部には個人として海外に渡航して「国際協力・国際支援」活動をする

教員はおり、途上国の学生を受け入れている教室もある。が、学部としての組織的な活動は行われていなかった。しかし、一方では平成18年3月に、教育における国際支援をめざし、JICA 中国と『包括連携協力事業の覚え書き』を交わしているが、その後の進展はなかった。

山口大学には平成19年に、大学の「国際戦略室」の協力を得て、国際協力を推進する組織として『国際協力活動推進プラットフォーム』が有志によって設立された。そして、この組織の代表である今津武教授（国際戦略室・経済学部）から、教育学部に途上国での教育支援活動事業への参加が要望され、また、「それについては、バングラデシュ、ラオス、カンボジア、またはベトナムのいずれかの国で活動を行ってこないか」との打診が『国際協力活動推進プラットフォーム』の会員でもあった私に打診があった。そこで、既に中進国への道を歩き始めたと思われるベトナムは除外し、現地の事情などを調査するため、平成20年2月に個人旅行としてバングラデシュとカンボジアに渡航した。ラオスについては、JICAと鳴門教育大学が行った理数科教育プロジェクトに専門家として参加した経験があったので渡航しなかった。そして、我々の力量、経験、活動のし易さ、経費などさまざまな要因を考慮し、カンボジアを対象とすることを決断した。

そこで、平成20年春に、教育学部教員有志を募り、カンボジアを対象国として支援活動

を実施するために「教育国際支援プロジェクト」チームを発足させた。そして、このチームを母体として、将来においては、国内外の行政機関、JICA、NGO等と連携をはかりながら教育に関する国際支援を目的に、その準備として経験を積み、一方では実績を上げながら、「教育学部・国際協力活動推進プラットフォーム連携プロジェクト」事業として、下記の活動を行ってきた。

2. これまでの活動

平成20年に開始した「教育学部・国際協力活動推進プラットフォーム連携プロジェクト」の活動や成果はそれぞれの報告書で詳述しており、以下はその概要である。

1) カンボジアへの渡航① 平成20年10月5日～10月16日

参加者：阿部弘和（理科教育）小粥良（国際理解教育）和泉研二（理科）

報告書：「カンボジア王国基礎教育調査」—カンボジア王国の学校教育と教

員養成の現状と問題点に関する現地調査

- 2) カンボジアへの渡航② 平成21年7月19日～7月26日
参加者：石井由理（国際理解教育）
報告書：「カンボジア国農村地域における教育改善プロジェクト」-事前調査
- 3) ワット・ボー小学校教員の山口大学への招聘と研修
平成22年11月26日～12月5日
参加者：プン・キム・チェン（校長）、マー・パーラー（教諭）、田中千草（校長補佐）
報告書：「国際協力活動推進プラットフォーム ワット・ボー小学校教員招聘プロジェクト」
*石井由理（国際理解教育）が企画および受け入れ責任者
- 4) カンボジアへの渡航③ 平成23年3月5日～3月12日
参加者：和泉研二（理科教育）、海野勇三（保健体育）、友定保博（保健体育）、阿部弘和（オブザーバーとして個人参加）
報告書：「カンボジア王国基礎教育調査」ーアジア地域における国際協力事業ーカンボジア王国 Siem Reap 州教員研修支援のモデル構築に関する研究ー実地調査報告書
- 5) カンボジアへの渡航④ 平成23年12月11日～12月18日
参加者：和泉研二（理科教育）、海野勇三（保健体育）佐伯里英子（実践センター、養護）、田中大輔（附属光小、体育）、林秀晃（理科教育4年生）、阿部弘和（元教育学部理科教育教授）
報告書：アジア地域における国際教育協力事業ーカンボジア王国 Siem Reap 州教員研修支援のモデル構築に関する研究ー実地調査報告書（2）

カンボジアへの4回の渡航で、各地の小学校、中学校、高校、教員養成学校（PTTCおよびRTTC）、国立大学、私立大学、国立教育研究所（NIE）、JICAカンボジア・オフィス、カンボジア日本大使館、NGO・NPO法人、支援活動の現場（STEP SAMII、CCF、CCH等）などさまざまな場所を訪れることによって、カンボジアの学校教育と教員養成の現状と問題点を単なる知識としてではなく、体験を通じて認識できたのは大きな成果である。また、ワット・ボー小学校の教員を教育学部に招聘できたのは予想外の成果であった。

日本の学校や教育を実際に見てもらいながら研修を行うのは必要かつ効果的であり、国際支援においてはぜひ取り入れたい活動である。この山口大学での研修では学校見学をしながら日本の学校教育に関する研修、環境教育の野外研修などに加え、カンボジアの学校教育についての講演と講義、また、シンポジウムでの発表も行って貰い、教員や学生に大きな感銘を与えることができた。3名のカンボジア教員の招聘は、第二回目の渡航の際に、教育改革に非常に熱心に取り組んでいる同校との話し合いの結果生まれた協働事業である。

第三の大きな成果は、調査活動だけでなく、カンボジアで実践的な活動、授業と教員に対する研修、を行ったことである。ともに Siem Reap 市のワット・ポー小学校で実施したが、授業は理科と体育、教員に対しては、「学校保健」に関する講習会と「生徒の健康管理と教員の役割」に関する講習会を実施した。生徒にとっては初めての内容と授業スタイルであったが、興味関心をもち、また、授業に充分ついてこられた。また、講習会の内容は、カンボジアの教員にとっては馴染みのないものであったが、その内容の必要性・重要性は充分理解され、熱心な質問が続いた。国際的な支援事業においては、求めるものと支援するものが一致しない場合がある。しかし、我々が行ったこれらの授業と教員研修は、日本の学校教育の現場と教員養成の実情を体験した、支援を受ける側（ワット・ポー小学校）の視点や要望を取り入れ、そして、双方の合意に基づき実施した協働活動である。今後のモデルとなる、実りある実践的活動であったと高く評価できる。

また、王立プノンペン大学でも学生に対して講義を行った。これら一連の実践活動を通じて、今後どのような内容でどのように支援を行えばよいか、また、解決すべき課題を知ることができた。

4回目の渡航では、養護教諭として経験豊富な佐伯客員准教授と附属光小学校の田中教諭が参加した。二人の現職教員が加わることによって効果的に活動することができた。カンボジア教員からの質問や要望に応えるためには学校現場をよく知る人材が絶対的に必要である。この事は予想されてはいたが、今後はより現場に近いメンバー構成で支援活動を行うことの必要性がよく理解できたこと、そして、実際に加わってもらったのは大きな成果であった。また、理科教育選修の学生 1 名を現地派遣メンバーとして加えたが、これは我々の支援活動を教育学部の学生の教育にどのように還元できるかを模索するためであった。

さらに、シムリアップ州とウドンメンチェイ州の計7校の小学校でアンケートによる小学生の学習・生活状況調査を行った。また、プノンペン大学においては、日本の教育事情に関する講義を実施するとともに、留学希望等、大学生の学習・生活状況に関するアンケート調査を実施した。これらは今後の活動に役立つ貴重な資料となるものである。

我々はカンボジアへの教育支援に備え、これら一連の活動を行ってきたが、既にワット・ポー小学校との交流が始まるなど予想もしなかった進展と多くの成果があった。準備の段階は終わり、本格的な教育支援活動を開始できる状態になったと思われる。

3. これからの活動計画（案）

私は既に大学業を卒業しているので今後の活動に関しては部外者であるが、プロジェクト責任者である和泉研二先生から、敢えて書くようにとの指示があったので、これまでの経験を活かし、計画をたててみた。

1) 教育支援プロジェクトの内容（目標）

(1) 教員養成への支援（シムリアップ教員養成学校への支援）

カンボジアの教員の資質向上のためにはこれから教員になる学生への教育を支援するのが最も効率的であり効果的である。この活動は既に設備や教室、授業参観、また、校長との面談も行った、小学校教員を養成しているシムリアップPTTCで行う。対象は学生および教員とする。学生に対しては実習や講義などの授業を集中講義として行う。教員に対しては講義、ワークショップなど様々な形式で支援を行う。養成学校の教員の学力はおそらく日本の高校生程度か、それよりは低いと推測される。

(2) 現職教員への支援

カンボジアには中核となる学校を中心に教員研修を行う制度があり、実際に研修を行っている学校や学校群がある。我々はそれに協力するという形で参加する。協力の仕方は、かつて理科教育教室が試みた、現職教員のスキルアップ・資質向上を目指して山口県内で行ったプロジェクト「ちゃぶ台方式による協働型教職研修」が参考になる（モデルとする）。実際に活動する場（拠点あるいは協力校）としては、上記のシムリアップPTTCやワット・ポー小学校が候補である。しかし、カンボジアでは農村地帯の方が支援をより必要とする状況にあり、既に下見を終えたウドンメンチェイ州のチョンカ

ル小学校（および学校群）も有力な候補である。

（３）日本研修

保健室、養護教諭、体育の授業、探求的学習などの授業・制度や教育上の概念などカンボジアに無いものを現地で理解してもらうのは非常に難しい。百聞は一見にしかず。より質の高い支援を行うためには現職教員や養成学校教員、また教育行政に関わる人などを山口大学に招聘し、日本での研修をすることが望ましい。

以上の「教員養成への支援」、「現職教員への支援」および「日本研修」を柱としてプロジェクトを行う。

2) プロジェクトにあたって解決すべき課題

（１）人材の確保

プロジェクトには大学教員だけでなく現職教員も必要であり、山口県教育委員会などと連携し、広く人材を確保する。また、プロジェクトには、調整係、交渉係、コーディネーターなども必要であり、さらに、場合によっては学校の設備・設営に関することなど様々な仕事が予想される。「学校教育」という専門性にこだわらず、また、官民を問わず広く協力者を集めておく事が望ましい。

（２）活動資金・プロジェクトの型

これまでは教育学部と国際協力活動推進プラットフォームからの予算に依って活動してきた。しかし、プロジェクトを恒常的に続けるためには、外部資金の獲得が必要となる。例えば、プロジェクトの内容からすれば JICA の「草の根技術協力事業」の「地域提案型」がよくマッチしている。これまでの実績から資格は充分にあり、大学が主導的な役割を分担し、山口県教育委員会などと連携し応募するのもその一つである。

カンボジアでは CITYNET/横浜市による「アジア地域における環境教育（ブノンペン市）/05～07」 広島県による「カンボジアの元気な学校プロジェクト（シェムリアップ州）/05～08」「カンボジアにおける小学校教員の授業能力の向上（タケオ州）/08～11」、「タケオ州における授業研究における教員の授業能力の向上フェーズⅡ（タケオ州）/11～14」、滝川市による「音楽教育を活用した教員の授業実践能力向上プロジェクト（シェムリアップ州/11～

14」などが「草の根技術協力事業」として実施されている。

3) 配慮すべきカンボジアの事情

(1) 学校教員の給料は非常に安く、教員は忙しい

シェムリアップ市のような町での四人家族の生活費（消費社会時代になりつつあり、生活費は急速に増大している）はおよそ3万円前後である。そして、学校教員の給料はその数分の一程度と思われる。残りは副業によって稼がねばならない。生徒数の多い町では、塾を開き収入を得るのが最も普通である。生徒数が多い塾を経営し、非常に豊かな生活をしている教員もいる。その他、タクシー運転手、市場で商店を経営している教員もいる。教員の学校での勤務時間は午前または午後の半日であるが、副業や家事もあり、一日中非常に忙しい。「普通の日には研修を受ける時間がない」状況に配慮して（夏期休暇期間等を利用するなど）、支援を進める必要がある。しかし、塾経営も難しく、また、副業の機会が少ない農村地帯では生活苦になり、辞めていく教員は少なくない。校長が28歳で、「誰も来てくれない」と嘆いている教員不足の学校も実際に見た。

シェムリアップ教員養成学校（PTTC）への入学志望者は多く、競争率も数倍～10倍と高い。しかし、入学後「教師だけの給料では生活ができない」という現実を知り、約4割の学生は教員になるのを諦めるそうである。

(2) 授業は二部制である

カンボジアの小、中、高校は、午前か午後に授業を受ける（同じ学年も午前と午後のクラスに分かれる）、完全な二部制で運営されている。従って全生徒、全教員（教員も午前か午後かのクラスを担当する）が、特別の日をつくらない限り、顔を合わせることはない。日本式の学校運営や学校行事を提案するには工夫が必要である。そして、授業は午前も午後も5時限で、（特に学年があがると）学習時間不足になり、十分な学力を習得できない。不足分は塾で補い、塾で教えることで教員の生活が成り立つという、困った状況にある。そして、授業時間数が限られているので、新たな教科やクラスの活動を提案しても受け入れるのは難しいかもしれない。よい方法を見つける必要がある。

(3) 「働き世代」の教育程度

長く続いた内戦中に、特にポルポト政権の時代には多数の国民が犠牲になり、また、社会制度や教育制度なども崩壊してしまった。ポルポト後も政治的社会的混乱は続き、社会の再建、教育の再建が本格的に始まったのは90年代になってからである。しかし、その後遺症は例えば、国家を担う人材、地域社会や教育界をリードする人材の問題、人材難として顕れ、国家発展の大きな障害となっている。

表1は25歳以上の社会を担う「働き世代」がどのような教育を受けたかを示したものである。この表でよく分かるように、この世代の約8割は小学校卒業程度かそれ以下の教育しか受けてない。現職教員には現在の制度からみると教員の資格を満たしてない者がかなり多い（この状態は資格を取得する制度によって解消中である）。教員を含むカンボジアの働き世代と「これくらいは分かっているだろう」と話していると「あれっ？」と思う事がある。これは個人の能力の問題でなく、彼らが十分な教育を受けられなかったからに違いない。また、教員養成の制度上、カンボジアには4年生大学を卒業した小中学校教員は存在しない。支援にあたっては、このような事情に配慮し、基本から丁寧に説明する心がける必要がある。

表1. 25歳以上の読み書き可能な人口の教育程度

教育程度	平均	男	女
教育を受けたことがない	3.2	2.4	4.1
小学校中退	47.2	4.0	55.1
小学校修了	26.8	29.4	23.9
中学校修了	18.8	22.7	14.5
高校修了	2.2	2.9	1.4
高等教育修了(大学卒)	1.8	2.6	1.0

注: 数値(%)はカンボジア2008年人口センサス確報結果による

ライフ・キャリアーが描けないカンボジアでは（学校を出ても、だからと言ってよい働き口が無い。国民の約7割は農業従事者で、家業をつげば（貧困であっても）暮らしていけ、読み書きができればそれ以上は必要ない。などの事情に起因していると推測される）学校教育の必要性・重要性への認識は必ずしも定着してないと思われる。しかし、私立大学も増え始めるなど（国立、私立をあわせ大学数は60を越えた）、都市部を中心に教育への関心は高まりつつあると思われる。

おわりに

国際支援も国際協調の時代である。最近の国際的な活動規範は「初等教育の充実」である。この規範からあまり逸脱すると国際社会（先進国クラブ）から「協調的でない」と指摘されるらしい。国際支援で活躍している何人かの方から『国際協調というのは先進国（欧米）の制度を押しつける、形を変えた植民地政策です』という言葉聞いたこともある。『国際協力研究科の理科教育にアフリカから何人も学生が来ています。彼らは同様に教育は重要だというのですが、では何のために教育が重要なのか、彼らをどのような国にしたいのか尋ねると、わからないと答えます』。(私信、広島大学 田畑佳則氏)。これは我々に対する問いかけでもある。

現在カンボジアでは、教育施策や教育行政の充実、優れたカリキュラムの作成が必要であり、カンボジアの人々自身が主体的にこれを行っていくべきであるとの観点から、CISEF が人材育成の場として王立プノンペン大学に教育学部と教育政策大学院の設置を試みている（教育大学・教育大学院プロジェクト）。この活動の推進者であり、長年カンボジアで教育支援を行ってきた、CISEF の理事、金森正臣氏（元愛知教育大）とお会いし、示唆に富んだお話を聞いたのは大きな収穫であった。私もかつて、CISEF とほぼ同じプロジェクトを鳴門教育大チームの一員としてラオスで試みたが、最後の段階で予算が認められなかった。国際支援の主役はあくまで当事国の人々であるべきだと思っている。

国際支援のあり方は多様であってよい。教育学部は人材に限りがあり、予算にも恵まれてはないが、できることをできるように、細々とでもあっても、長く活動が続くことを願っている。

最後に、既に卒業生である私をこの活動に誘ってくれた和泉研二氏に、また、仲間として親切に接してくれた山口大学の皆様に深く感謝致します。

Ⅷ カンボジアの子どもたちの生活と意識(調査結果の概要)

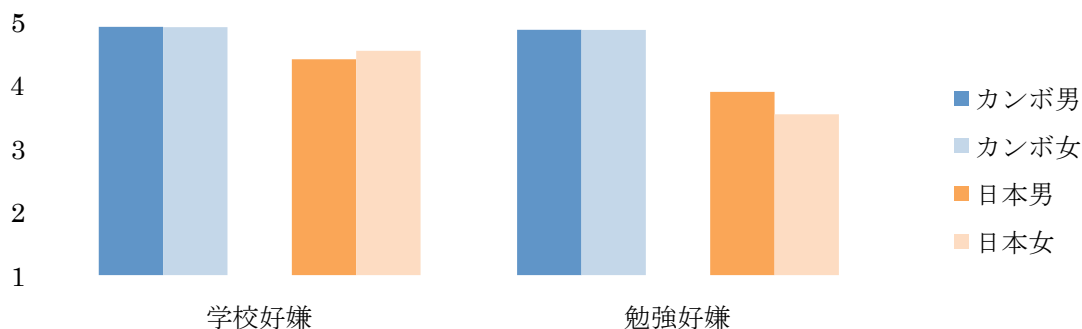
海野勇三、佐伯里英子、田中大輔、林秀晃、阿部弘和、和泉研二

この度の第2次探索的調査では、カンボジアの子どもたちの生活と意識の実態に関し、地域間比較を含めてより詳細に探るために質問紙調査（日本語版および現地語であるクメール語版を本章末に掲載）を実施した。対象地域と児童数は表-5のとおりである。ちなみに、日本の子どもたちにも同様の調査を実施してデータの比較も行った。ここでは、データの集計結果と若干の考察を述べる。

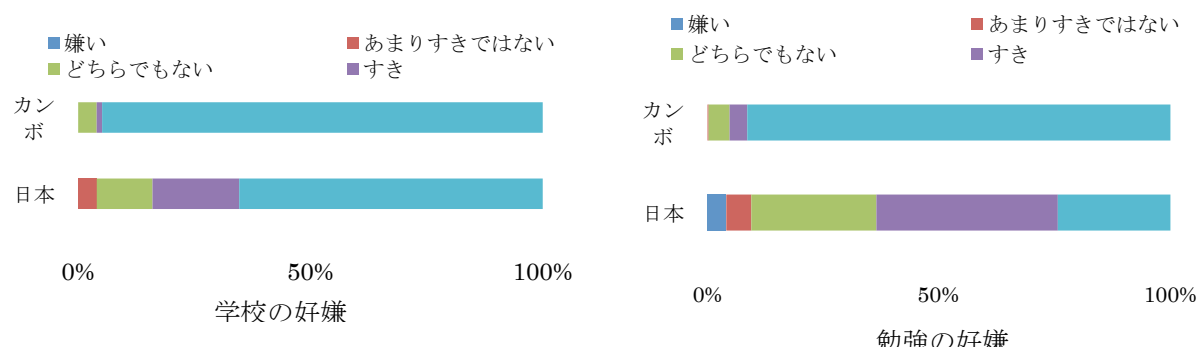
エリア	小学校	二部制	男	女	計	エリア計
市街地	ワットポー小学校	両方	85	92	177	177
ローカル (市街地近郊)	宮下小学校	午前	17	7	24	198
	ササースダム小学校	午後	41	45	86	
	ワットチャオク小学校	午後	38	50	88	
北部 (農村部)	チョンカル小学校	午前	26	34	60	60
	カンボジア合計		207	228	435	435
日本	山口県 F 小学校		45	30	75	75

1) 学校と勉強について

「あなたは学校が好きですか」そして「あなたは勉強が好きですか」を5件法で尋ねた。



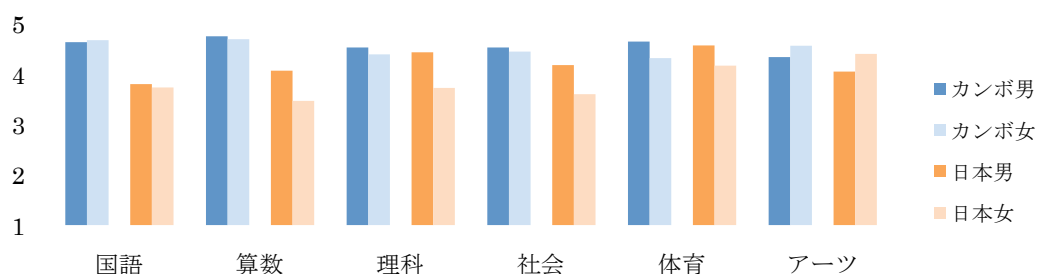
カンボジアの子どもたちは、学校と勉強が大好きである。義務教育が100%実施されている日本とは違い、学校へ通いたくても通えない子どもたち（家の手伝い、貧しさ等）がいる中で、学校へ行くこと、そしてみんなと勉強することを子どもたちは渴望している。



そこで、平均点ではなく、回答をラベル別でみると、日本の子どもたちには、すでに学校に対しては「あまり好きではない」が存在し、勉強に対しては「あまり好きではない」子どもに加え、「嫌い」と答える子どもたちもいた。また、好きは好きでも、「好き」か「大好き」であるかの違いがカンボジアの平均値との差に反映している。

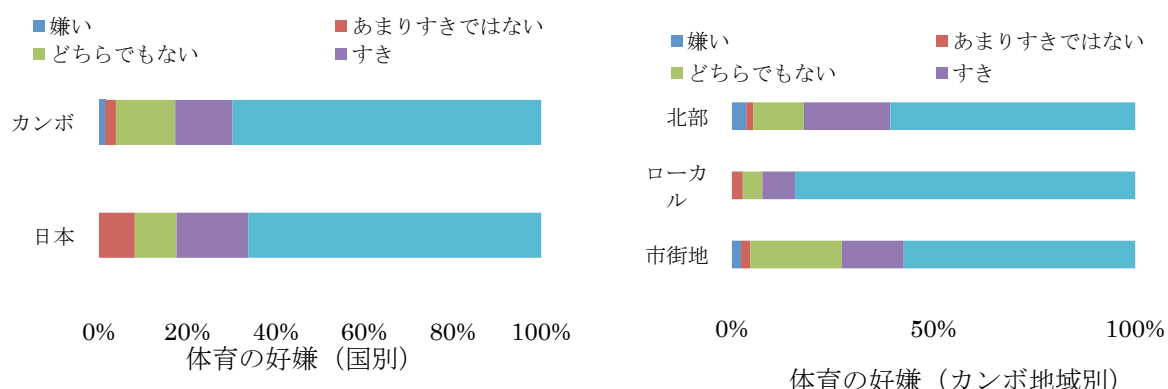
2) 各教科の好き嫌いについて

各教科の好き嫌い度について5件法で尋ねてみた。カンボジアの子ども達は全教科で高得点、つまり「大好き」と回答している。また、「体育」と「アーツ」で男女間に多少の差が認められるが、その他の教科では男女差はみられない。参考までに日本の子どもたちは、男女差も顕著であり、教科間の好嫌度も異なっていた。男子に比して女子の低得点は、日本の課題として別の機会に深い分析と精査が必要であろう。



また、体育の好き嫌い度をラベル別にみると、国別では特徴は認められない。ただ、日本とカンボジアでは、子どもたちの経験している体育の授業内容が決

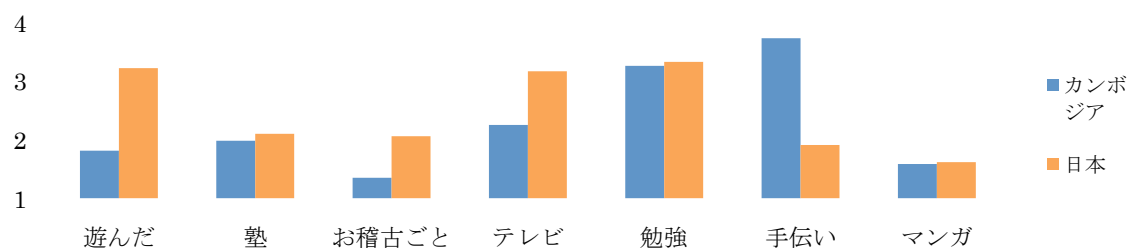
定的に異なることを念頭に置いて理解する必要がある。カンボジアでは、体育授業は十分に普及しているわけではない。すでに述べたとおり、クメール体操や集団行動、あるいはせいぜい簡単な運動遊びを短時間で実施している程度である。さらにカンボジア内の地域別でみると、ローカルエリアで体育を好きと回答する割合が高くなっているが、これは調査対象校の一つであるワットチャオク小学校が、その地域の体育授業の中核校として位置づいていることが関係しているものと推察される。



3) 子どもたちの放課後の過ごし方

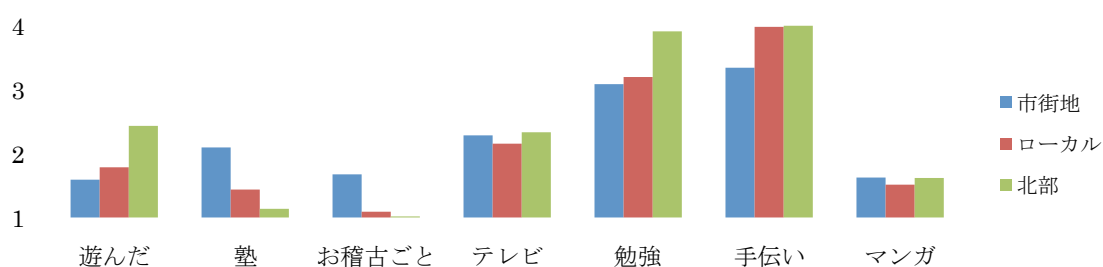
学校を終えて、どんな活動に、どれくらいの時間を使って過ごしているのかを尋ねた。カンボジアでは、通常、学校は2部制を敷いており、子どもたちは午前の部(7:00~11:00)または午後の部(13:00~17:00)の半日を学校で学ぶ。たっぷり遊んでいるのは日本の子ども達で、たっぷりと家の手伝いをしているのがカンボジアの子ども達であることがわかる。テレビとお稽古事が多いのも日本である。

(1=なし、2=~30分、3=31~60分、4=61~90分、5=91~120分、6=121分以上)



次に、カンボジアのエリア別に平均値を比較してみよう。電気が通じていな

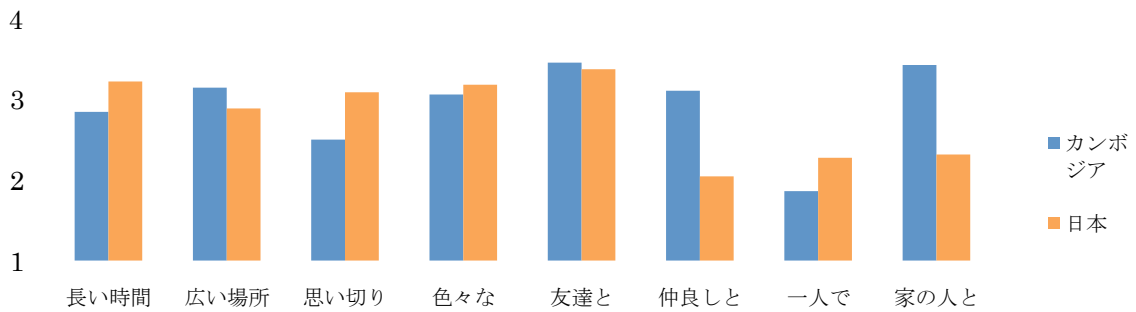
い北部（陽が落ちると寝るしかなくなる）においては、やはり、塾やお稽古事に時間を割くことはなく、家の手伝い、勉強、次いで子どもたち同士で遊ぶという生活のようである。それに比して、市街地の子どもたちは手伝いや勉強の時間が減少する分、塾やお稽古事に費やす時間が増える。テレビやマンガの時間は地域によって違いはみられないようだ。ちなみに、北部ではバッテリーを使って電化製品を使用しており、村にはバッテリーを充電してくれる店がある。



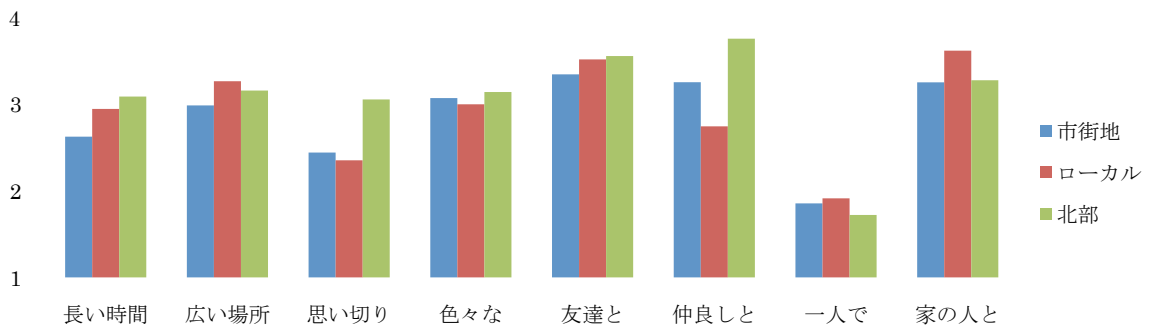
4) 日常の生活・遊びに対する欲求と幸せ感・満足感

日常の生活に対して、それぞれの欲求度や満足度を尋ねた。質問項目は、「もっと長い時間遊びたい」、「もっと広い場所で遊びたい」、「思い切り遊びたい」、「もっと色々な遊びをしたい」、「もっと色々な友達と遊びたい」、「仲良しの友達と遊びたい」、「一人で好きなことをしていきたい」、「家の人ともっと遊びたい」の8項目である（「とてもそう思う」－「ぜんぜんそう思わない」の4件法）。

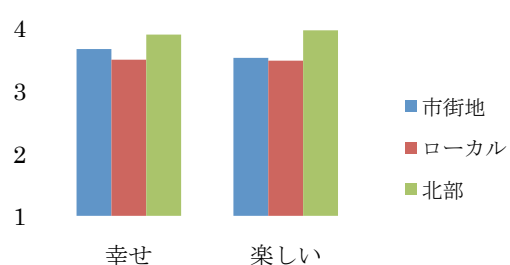
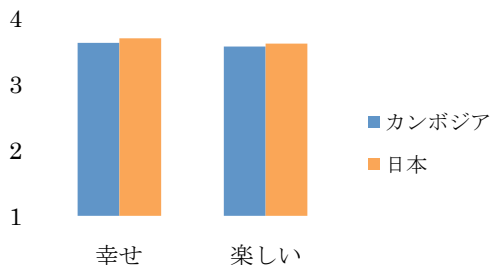
「家の人ともっと遊びたい」と「仲良しの友達と一緒に遊びたい」でカンボジアの子どもたちの得点が高いのに対し、日本は極端に低い。逆に「もっと長い時間遊びたい」、「思い切り遊びたい」は日本の子ども達の方が高得点になっていた。日本の子ども達は、放課後の過ごし方ではカンボジアの子ども達よりも長い時間遊んでいたが、もっと遊びたいと欲求している。一方、カンボジアの子ども達は、放課後に家の手伝いをタププリとしていて、それでも「家の人ともっと遊びたい」と願っている。



エリア別にみると、北部の子ども達の遊びたい欲求(長い時間、思いっきり、仲良しと)が強いことがわかる。逆に市街地の子ども達は「もっと長い時間遊びたい」「思い切り遊びたい」で低得点となっている。



「あなたは今、幸せですか」、そして「あなたは毎日が楽しいですか」を尋ねてみた。国別では差異は認められないが、カンボジアのエリア別にみると、北部地域の子ども達で幸せ感が高く、毎日を楽しく生活している実感を持っているようである。北部地域は、支援の届きにくい貧困な生活環境下にあるのだが、子ども達はその中で幸せを感じ、楽しく生活しているという事実は示唆に富む。



5) 将来なりたい職業種

「あなたが大人になった時に、なりたい職業(仕事)は何ですか？」を自由記

述で3つまであげてもらい、回答内容を表-6に示す29の職種カテゴリで分類し集計を試みた。

	カテゴリ	具体例		カテゴリ	具体例
1	コンピュータ	コンピュータ関連、IT関連	16	航空	パイロット、スチュワーデス
2	スポーツ	サッカー選手、スポーツ選手	17	国際	ユニセフ、WHO、外国人と仕事
3	ドライバー	ドライバー、船の運転手	18	作家	小説家、イラストレーター、ゲームクリエイター
4	ペット	トリマー、動物の飼育員	19	社長	経営者、社長
5	医療	医者、薬剤師、看護師、獣医	20	小売業	商売、写真屋、本屋、雑貨店店員
6	飲食	調理師、ラーメン屋、料理研究家	21	新聞記者	新聞記者
7	会社員	会社員、アニメ会社員、ビジネスマン	22	政治	首相、政治家
8	学術	学者、歴史研究者、心理学者	23	製造業	工場社員、ものづくり、ロボット技師
9	観光	ホテルマン、ガイド、通訳	24	農業	農家
10	教育	教師、保育士、校長、	25	服飾	仕立て屋、デザイナー、美容師
11	金融	銀行員、銀行のオーナー	26	兵士	兵隊
12	警察	警察	27	放送	アナウンサー、ディレクター
13	芸能芸術	画家、ダンサー、声優、女優	28	法曹	弁護士、検事、裁判官
14	建築	エンジニア、大工、建築士	29	その他	偉い人、勉強したい、消防士、経理
15	公務員	公務員			貧しい人助けたい、大学卒業、家事

順	日本		カンボジア		市街地		ローカル		北部	
1	その他	12.4	医療	25.6	医療	25.7	教育	29.0	教育	31.7
2	医療	11.6	教育	22.1	教育	11.4	医療	23.9	医療	30.6
3	芸能芸術	9.3	その他	7.9	その他	9.5	警察	7.1	警察	19.4
4	スポーツ	8.4	警察	6.4	観光	6.7	その他	6.9	その他	6.1
5	学術	8.4	芸能芸術	5.2	小売業	6.5	芸能芸術	6.4	兵士	4.4
6	放送	5.3	小売業	4.7	服飾	5.8	観光	4.0	芸能芸術	2.8
7	ペット	4.9	観光	4.6	法曹	4.8	兵士	4.0	小売業	2.8
8	教育	4.9	服飾	3.8	芸能芸術	4.7	小売業	3.7	農業	2.2
9	作家	4.9	兵士	2.6	会社員	3.2	服飾	3.2		
10	服飾	4.9	法曹	2.4	建築	3.0	会社員	2.2		

表－8 もっとも就きたい職業人気No.10（国別・男女別）

順	日本・男		日本・女		カンボジア・男		カンボジア・女	
	1	スポーツ	22.2	医療	16.7	教育	27.5	教育
2	医療	17.8	芸能芸術	16.7	医療	25.6	医療	36.8
3	建築	11.1	ペット	10.0	その他	6.3	その他	3.5
4	芸能芸術	8.9	作家	10.0	警察	5.3	法曹	3.1
5	学術	8.9	飲食	6.7	建築	5.3	観光	2.6
6	作家	6.7	学術	6.7	芸能芸術	4.8	服飾	2.6
7	法曹	4.4	教育	6.7	観光	4.3	芸能芸術	2.2
8	服飾	4.4	服飾	6.7	農業	2.4	小売業	2.2
9	政治	4.4	放送	6.7	兵士	2.4	会社員	1.8
10	放送、教育、会社員、その他	2.2	その他、スポーツ、国際、社長	3.3	ドライバー、飲食、学術、会社員	1.9	金融、航空、社長、農業	0.9

カンボジアの子ども達のなりたい職業は、教育職と医療職でおよそ48%を占めている。

人数は少ないが、プノンペン大学でも、類似の調査を行った。海外留学の希望は強いが、主に費用の面が課題としてあがっていた。今後、これらのデータもまとめるとともに、日本とカンボジアの児童・学生の比較検討を進め、今後の活動に役立てていきたい。

2011.12.13

小学生の生活しらべ

山口大学教育学部(日本国)

この調査は、小学生のみなさんが毎日どのような生活をしているのかについて調べるためにおこなうものです。テストではありませんので、あなたのことについて安心して答えてください。よろしくお願いします。

I. はじめに、あなたのことについてお聞きします。

あなたは何年生ですか。 _____ 年生

あなたは男子ですか。女子ですか。

1. 男子 2. 女子

今日、学校で勉強したのは、午前の部ですか。それとも午後の部ですか。

1. 午前 2. 午後

2011.12.13

II. あなたの学校生活のことについてお聞きます。あてはまるものに○をつけてください。

Q1 : あなたは、学校が好きですか？

1. 大好き 2. 少しだけ好き 3. どちらでもない 4. あまり好きでない 5. 嫌い

Q2 : あなたは、勉強が好きですか？

1. 大好き 2. 少しだけ好き 3. どちらでもない 4. あまり好きでない 5. 嫌い

Q3 : あなたは、学校の授業科目がどれくらい好きですか？ あてはまるものに○をつけてください。

国語 1. 大好き 2. 少しだけ好き 3. どちらでもない 4. あまり好きでない 5. 嫌い

算数 1. 大好き 2. 少しだけ好き 3. どちらでもない 4. あまり好きでない 5. 嫌い

理科 1. 大好き 2. 少しだけ好き 3. どちらでもない 4. あまり好きでない 5. 嫌い

社会 1. 大好き 2. 少しだけ好き 3. どちらでもない 4. あまり好きでない 5. 嫌い

体育 1. 大好き 2. 少しだけ好き 3. どちらでもない 4. あまり好きでない 5. 嫌い

アーツ・家庭科 1. 大好き 2. 少しだけ好き 3. どちらでもない 4. あまり好きでない 5. 嫌い

III. 普段の生活のことについてお聞きます。あてはまるものに○をつけてください。

Q4 : あなたは、今日の朝は何時ころ起きましたか？ _____時_____分ごろ

Q5 : あなたは、昨日の夜は何時ころ寝ましたか？ _____時_____分ごろ

Q6 : あなたは、朝食を食べてから学校に来ますか？

1. 必ず食べる 2. ときどき食べる 3. ほとんど食べない 4. 食べない

Q7 : あなたは、昨日、次のようなことをどれくらいしましたか？それぞれのことに使った時間を1から6の中から一つ選んで○をつけてください。

	なし	1分から30分まで	30分から1時間まで	1時間から1時間半まで	1時間半から2時間まで	2時間以上
外で体を動かして遊んだ	1	2	3	4	5	6

2011.12.13

学習塾に行っていた	1	2	3	4	5	6
おけいこ事やスポーツクラブに行っていた	1	2	3	4	5	6
テレビやビデオを見ていた	1	2	3	4	5	6
家で勉強していた	1	2	3	4	5	6
お手伝いをしていた	1	2	3	4	5	6
マンガを読んでいた	1	2	3	4	5	6
その他 ()	1	2	3	4	5	6

Q8：あなたは、普段、マンガ本を読みますか？

1. 毎日読む 2. よく読む 3. 時々読む 4. ほとんど読まない 5. 読まない

Q9：あなたは、普段、テレビを見ますか？

1. 毎日見る 2. よく見る 3. 時々見る 4. ほとんど見ない 5. 見ない

Q10：次のような電気製品の中で、あなたやきょうだいだけが使えるものがありますか？あるものすべての番号に○をつけてください。

- ①テレビ ②ビデオ ③パソコン ④テレビゲーム ⑤携帯電話 ⑥なし

IV. あなたは普段の遊びについて次のように思うことがありますか？あてはまるものに○をつけてください。

	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
もっと長い時間遊びたい	1	2	3	4
もっと広い場所で遊びたい	1	2	3	4
外で思いっきり遊びたい	1	2	3	4
もっといろいろな遊びをしてみたい	1	2	3	4

2011.12.13

もっといろいろな友達と遊びたい	1	2	3	4
仲良しの子だけと遊びたい	1	2	3	4
一人で好きなことをしたい	1	2	3	4
おうちの人ともっと遊びたい	1	2	3	4

V. あなたの将来の夢についてお聞きします。あてはまるものに○をつけてください。

Q12 : あなたは、できたら高校に行きたいと思いますか? 1. はい 2. いいえ

Q13 : あなたは、できたら大学に行きたいと思いますか? 1. はい 2. いいえ

Q14 : あなたがおとなになった時に、なりたい職業(仕事)は何ですか? なりたい順番に、3つまで答えてください。

1番なりたい職業(仕事) : _____

2番目になりたい職業(仕事) : _____

3番目になりたい職業(仕事) : _____

VI. 最後に、あなたの今の気持ちをお聞きします。

Q15 : あなたは今、しあわせですか?

1. とてもそう思う 2. 少しそう思う 3. あまりそう思わない 4. ぜんぜんそう思わない

Q16 : あなたは、毎日が楽しいですか?

1. とてもそう思う 2. 少しそう思う 3. あまりそう思わない 4. ぜんぜんそう思わない

これで終わりです。ご協力ありがとうございました。

ការសិក្សាស្រាវជ្រាវពីការរស់នៅរបស់សិស្សបឋមសិក្សា

សកលវិទ្យាល័យយ៉ាម៉ាហ្គឹសិ ខ្ពង់ខ្ពស់វិទ្យាសាស្ត្រអប់រំ (ប្រទេសជប៉ុន)

ការសិក្សាស្រាវជ្រាវនេះគឺជាការអង្កេតមើលអំពីជីវភាពរស់នៅដែលប្អូនធ្វើជាប្រចាំថ្ងៃ។ វាមិនមែនជាការប្រឡងទេ ដូច្នេះសូមប្អូនចូលរួមឆ្លើយទៅតាមសំណួរ។

I. ជាដំបូង សូមសួរអំពីប្អូនចង់រៀនសូត្រខ្លះៗ

- តើប្អូនរៀនថ្នាក់ទីប៉ុន្មាន? ថ្នាក់ទី
- ភេទប្រុស ឬភេទស្រី? 1. ប្រុស 2. ស្រី
- តើថ្ងៃនេះប្អូនមករៀនពេលព្រឹក ឬ ពេលល្ងាច? 1. ពេលព្រឹក 2. ពេលល្ងាច

II. សូមសួរអំពីការរៀនសូត្ររបស់ប្អូននៅសាលារៀន។ សូមគូស ○ ទៅលើចម្លើយណាមួយ

- សំណួរ1: តើប្អូនចូលចិត្តសាលារៀនឬទេ?
- 1. ចូលចិត្តយ៉ាងខ្លាំង 2. ចូលចិត្តតិចៗ 3. ធម្មតា 4. មិនសូវចូលចិត្ត 5. មិនចូលចិត្តទេ
- សំណួរ2: តើប្អូនចូលចិត្តការសិក្សាឬទេ?
- 1. ចូលចិត្តយ៉ាងខ្លាំង 2. ចូលចិត្តតិចៗ 3. ធម្មតា 4. មិនសូវចូលចិត្ត 5. មិនចូលចិត្តទេ
- សំណួរ3: តើប្អូនចូលចិត្តប៉ុណ្ណាលើមុខវិជ្ជានៅសាលារៀន?
- ភាសាខ្មែរ 1. ចូលចិត្តយ៉ាងខ្លាំង 2. ចូលចិត្តតិចៗ 3. ធម្មតា 4. មិនសូវចូលចិត្ត 5. មិនចូលចិត្តទេ
- គណិតវិទ្យា 1. ចូលចិត្តយ៉ាងខ្លាំង 2. ចូលចិត្តតិចៗ 3. ធម្មតា 4. មិនសូវចូលចិត្ត 5. មិនចូលចិត្តទេ
- វិទ្យាសាស្ត្រអនុវត្ត 1. ចូលចិត្តយ៉ាងខ្លាំង 2. ចូលចិត្តតិចៗ 3. ធម្មតា 4. មិនសូវចូលចិត្ត 5. មិនចូលចិត្តទេ
- សិក្សាសង្គម 1. ចូលចិត្តយ៉ាងខ្លាំង 2. ចូលចិត្តតិចៗ 3. ធម្មតា 4. មិនសូវចូលចិត្ត 5. មិនចូលចិត្តទេ
- កីឡា 1. ចូលចិត្តយ៉ាងខ្លាំង 2. ចូលចិត្តតិចៗ 3. ធម្មតា 4. មិនសូវចូលចិត្ត 5. មិនចូលចិត្តទេ
- សិល្បៈ/គេហវិជ្ជា 1. ចូលចិត្តយ៉ាងខ្លាំង 2. ចូលចិត្តតិចៗ 3. ធម្មតា 4. មិនសូវចូលចិត្ត 5. មិនចូលចិត្តទេ

III. សូមសួរអំពីការរស់នៅរាល់ថ្ងៃរបស់ប្អូននៅផ្ទះ។

- សំណួរ4: ព្រឹកមិញ តើប្អូនក្រោកពីដំណេកនៅម៉ោងប៉ុន្មាន? ម៉ោង
- សំណួរ5: យប់មិញ តើប្អូនក្រោកចូលគេងនៅម៉ោងប៉ុន្មាន? ម៉ោង
- សំណួរ6: ក្រោយពីញ៉ាំអាហារពេលព្រឹក តើប្អូនមកសាលារៀនឬទេ? សូមគូស ○ ទៅលើចម្លើយណាមួយ
- 1. ញ៉ាំកុំខាន 2. យូរៗញ៉ាំម្តង 3. មិនធ្លាប់ញ៉ាំសោះ 4. មិនញ៉ាំទេ

សំណួរ7: ម្សិលមិញ តើប្អូនបានធ្វើអ្វីខ្លះ? ដោយមើលពេលវេលាក្នុងតារាងខាងក្រោម ក្នុងចម្លើយ ពីលេខ1ដល់លេខ6 សូមជ្រើសរើសហើយគូស ○ ទៅលើចម្លើយណាមួយ

	អត់សោះ	1 → 30នាទី	30នាទី → 1ម៉	1ម៉ → 1ម៉កន្លះ	1ម៉កន្លះ → 2ម៉	ជាង2ម៉ោង
រត់លេងខាងក្រៅ	1	2	3	4	5	6
ទៅរៀនគូ	1	2	3	4	5	6
រៀនតូបកម្រិតនិងទៅភ្ជាប់កីឡា	1	2	3	4	5	6
មើលទូរទស្សន៍និងវីដេអូ	1	2	3	4	5	6
រៀននៅផ្ទះ	1	2	3	4	5	6
ជួយកិច្ចការផ្ទះ	1	2	3	4	5	6
អានរឿងពុករលួយ	1	2	3	4	5	6
ផ្សេងៗទៀត	1	2	3	4	5	6

សំណួរ8: ធម្មតាជារៀងរាល់ថ្ងៃ តើប្អូនអានសៀវភៅរឿងពុករលួយទេ?

- 1. អានរាល់ថ្ងៃ 2. អានជារៀងៗ 3. យូរៗអានម្តង 4. មិនដែលអានសោះ 5. មិនអានទេ

សំណួរ9: ធម្មតាជារៀងរាល់ថ្ងៃ តើប្អូនមើលទូរទស្សន៍ឬទេ?

- 1. មើលរាល់ថ្ងៃ 2. មើលជារៀងៗ 3. យូរៗមើលម្តង 4. មិនដែលមើលសោះ 5. មិនមើលទេ

សំណួរ10: តើប្អូននិងបងប្អូនមានគ្រឿងអេឡិចត្រូនិចប្រើឬទេ? សូមគូសចម្លើយដែលមានខាងក្រោម

- 1. ទូរទស្សន៍ 2. វីដេអូ 3. កុំព្យូទ័រ 4. ហ្គេមទូរទស្សន៍ 5. ទូរស័ព្ទ 6. អត់មានសោះ

IV. ធម្មតាជារៀងរាល់ថ្ងៃ តើប្អូនមានគិតចង់លេងកំសាន្តដូចដែលមានក្នុងតារាងខាងក្រោមឬទេ?

សូមគូស ○ ទៅលើចម្លើយណាមួយ

	ពិតជាគិតថាអញ្ចឹង	គិតអញ្ចឹងដែរ	មិនគិតអញ្ចឹងទេ	អត់គិតអញ្ចឹងសោះ
ចង់លេងអោយបានយូរ	1	2	3	4
ចង់លេងនៅកន្លែងទូលាយជាងនេះ	1	2	3	4
ចង់តែលេងខាងក្រៅ	1	2	3	4
ចង់លេងកំសាន្តផ្សេងជាច្រើន	1	2	3	4
ចង់លេងជាមួយមិត្តភ័ក្រងទៀត				

ចង់លេងតែជាមួយសិស្សដែលស្និទ្ធស្នាល				
ចង់លេងអ្វីតែម្នាក់ឯង				
ចង់លេងជាមួយអ្នកនៅផ្ទះ				

V. សូមសួរអំពីក្តីស្រមៃទៅអនាគតរបស់ប្អូនៗ។ សូមគូស ០ ទៅលើចម្លើយណាមួយ

សំណួរ12: បើសិនមានលទ្ធភាព តើប្អូនគិតចង់ទៅរៀនបន្តនៅវិទ្យាល័យឬទេ? 1. ចង់ 2. អត់ចង់

សំណួរ13: បើសិនមានលទ្ធភាព តើប្អូនគិតចង់ទៅរៀនបន្តនៅសកលវិទ្យាល័យឬទេ? 1. ចង់ 2. អត់ចង់

សំណួរ14: នៅពេលធំឡើង តើប្អូនចង់ធ្វើការអ្វី? សូមសរសេរចម្លើយអោយបានប៉ះ

1. ការងារចង់ធ្វើទីមួយ:
2. ការងារចង់ធ្វើទីពីរ:
3. ការងារចង់ធ្វើទីបី:

VI. ចុងក្រោយ សូមសួរអំពីអារម្មណ៍របស់ប្អូនៗ

សំណួរ15: សព្វថ្ងៃនេះ តើប្អូនមានសេចក្តីសុខឬទេ?

- 1. ពិតជាគិតថាអញ្ចឹង 2. គិតថាអញ្ចឹងដែរ 3. មិនសូវគិតអញ្ចឹងទេ 4. មិនដែលគិតថាអញ្ចឹងសោះ

សំណួរ16: ជារៀងរាល់ថ្ងៃ តើប្អូនសប្បាយចិត្តឬទេ?

- 1. ពិតជាគិតថាអញ្ចឹង 2. គិតថាអញ្ចឹងដែរ 3. មិនសូវគិតអញ្ចឹងទេ 4. មិនដែលគិតថាអញ្ចឹងសោះ

-ចប់-

សូមអរគុណចំពោះកិច្ចសហការរបស់ប្អូនៗ

IX おわりに

和泉研二

今回のプロジェクトでは、カンボジアの小学校および教員養成に関する現地調査をさらに進めるとともに、現地のニーズに沿った支援の試行として、教員対象に学校保健の講習会および体育授業を実施した。

これまでのプロジェクト活動を通して、ワット・ボー小学校をはじめ、今後の活動の足場となり得る多くの学校とのつながりを持つことができた。保健体育・養護および理科を中心にこれまで培ってきた経験をもとに、他機関との連携を図る準備は整ってきたと考える。今回の成果も含め、これまでの活動の成果を総括し、平成24年度に向けて検討を進めたい。

本プロジェクトは、『国際協力活動推進プラットフォーム』および山口大学教育学部学部長裁量経費（平成23年度）からの資金援助によって実施した。実施に際し、終始励ましと適切なお助言を頂いた『国際協力活動推進プラットフォーム』代表の今津武教授（山口大学経済学部）、現地調査の計画および実現にご支援頂いた石井由理教育学部教授、古賀和利学部長に感謝致します。

現地では、ワット・ボー小学校のブン・キムチェン校長、田中千種校長補佐、シェムリアップ初等教育教員養成学校の **Leav Ora** 校長ほか、現地訪問先小学校関係者、JICA の小林雪治次長、金澤祥子氏、水沢文氏、小川紀子氏の各コーディネータ、NPO 法人 CIESF の金森正臣 理事（カンボジアオフィス副代表）、王立プノンペン大学 OUM RAVY 教授、在カンボジア日本大使館の近藤直光二等書記官、NPO 法人 Hearts of Gold の山口拓氏をはじめとし、多くの方々からご協力、ご援助を得ました。ご対応頂いた皆様に深く感謝申し上げます。

U. K. Vichidh氏、Khiev Vannap氏、Tom Bunrath氏（NCT NewCambodia Tours）には、通訳やアンケートの翻訳をはじめ、現地での活動を全般にわたり支えて頂きました。心より感謝致します。